富山 如大地

— 第145号 —

発行人　幽溪　浩
発行所　富山市総曲輪２丁目８－29　真宗大谷派富山教務所
編　集　富山教区如大地編集委員会
電 話　076－421－9770　FAX　076－421－9799
教区・別院ホームページ　http://toyamabetsuin.jp/
教務所アドレス　toyama@higashihonganji.or.jp

俱會一處（くえいっしょ）　（京都 三千院にて）

もくじ

・富山教区同朋総会　酒井義一 氏　2～11
・真宗仏事研修会　近松　誉 氏　12～21
・研修会報告　22～25
・寄稿　26～28
・見聞　29
・教区だより　30～32

冬は「お講どき」

今年の冬は暖冬であった。例年、除雪作業におわれるのが北陸の冬。

司馬遼太郎の『峠』は、幕末の越後長岡藩、河井継之助を描いた小説である。峠の最初の一文は「雪が来る」で始まり「毎年のことだ」、そして「北国は損だ」と続く。

「芽吹きの春」「命輝く夏」「実りの秋」そして「冬の時代」。冬のイメージはよくない。

「連々講」という新川郡の広域講がある（通称「冬のごしょはん」、「冬のお座」）。達如上人の消息（文化二年・一八〇五年に下付）を巡回し、各地で勤まっている。消息は、お講に参加する心構えから始まる。ただ参加するのではなく、お互いに信心について真剣に語り合うことが大切。その後に親鸞聖人が説かれた他力信心を経文から示し、御恩報謝の念仏をすすめる内容となっている。

昭和二十八年（一九五三年）の記録によると巡回時期は二月四日～四月三日、開催地区は百四十二（舟橋村、立山町、上市町、滑川市、富山市）。関係寺院は三十九ヵ寺（消息では四十九ヵ寺）。現在は数カ所のみの開催であるが、かつては同行が僧侶とともに各地区の家々を巡回していた。

しぐるるや　越の村々　お講どき　（句仏上人）

富山の真宗門徒にとって、冬は「聞法」の絶好の機会であった。

第十一組　等通寺　髙谷　純夫

【富山教区教化テーマ】
「なむあみだぶつ」を訪（たず）ねませんか？

富山教区同朋総会

ハンセン病問題と真宗

酒井 義一 氏

二〇一八年十二月十七日、富山別院本堂において教区同朋総会を酒井義一氏（真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会委員・東京教区存明寺住職）を講師に迎え、六十六名参加のもと開催しました。

今年度の同朋総会は、来る二〇一九年九月十三日～十四日に第十一回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会が富山県にて開催されることにともない、一人ひとりがあらためてハンセン病問題と真宗を学び、自分の問題として関わっていくことを願いとし、当日は、人権啓発ビデオ「家族で考えるハンセン病」を鑑賞した後、酒井氏よりおはなし、班別座談、まとめのおはなしの日程で進めました。

本誌では、酒井氏のおはなしを掲載させていただきます。

はじめに

東京教区からやって参りました酒井と申します。今日は「ハンセン病問題と真宗」というテーマをいただきましたので、私にとってハンセン病問題とはどのような問題なのか、そのことを通して真宗の教えを学ぶとは一体どういうことなのかについてお話をさせていただきたいと思います。未熟者でありますのでどこまでお話ができるかわかりませんが、今の思いを表現させていただきたいと思います。

私は三十数年前から、東京の多磨全生園の真宗のご門徒の方々と交流がございました。以来、今もハンセン病だった方々と交流を続けています。一言でいうと、私にとっては宝のようなものであり、そこでいろんな人たちと出会って、いろんなことを教えていただいて、そして普段は考えもしなかったことを考えるようになりました。それは、ハンセン病問題のおかげといってもいいと思います。

本当に私にとってハンセン病問題というのは、非常に大切な大きな問題であります。と言いましてもこの程度でありますので、まだまだ学んでいかなければならないことがいっぱいあります。

「ハンセン病問題を学ぶ」と「ハンセン病問題に学ぶ」

今日最初に申し上げたいことは、「ハンセン病問題を学ぶ」ということと「ハンセン病問題に学ぶ」ということです。

これは真宗を学ぶということでよく言われますが「ハンセン病問題を学ぶ」という学び方と「ハンセン病問題に学ぶ」という学び方は、自ら学ぶ方法とか内容が変わってくるということを最初に申し上げたいと思います。「ハンセン病問題を学ぶ」というのは「私が」という、「私が」まずあってハンセン病問題がある。いろんな問題が世の中にありますが、その中からハンセン病問題を選んでハンセン病の歴史を学ぶとか、それがどういう問題なのかを学ぶ。そのようになるかと思います。

でも、そういうこととは違った

学び方が大事だと私は思っていまして、それは「私が」というところを変えて、ハンセン病問題に私の生き方を学ぶということです。こういう学びのスタイルというのが実は「ハンセン病問題に学ぶ」ということの中に、すでに用意されている。そんな気がしています。「私が」まずあって、数ある問題の中からハンセン病問題を選んで学ぶという、そういう形はとるかもしれませんが、よくよくハンセン病問題を尋ねてみれば、ハンセン病問題から「本当に人々の悲しみがわかるような人間になってね」という形で願われ続けている。問いかけられ続けている。「ハンセン病問題に学ぶ」というのはそういうことではないかということを今日は申し上げたいと思っています。ハンセン病問題から私の生き方が問われ続けている。願われ続けている。問いや願いと出会う、そういう質の問題がハンセン病問題ではないかと思っています。

これは真宗を学ぶということとまったく同じであります。「私が」まずあって数ある宗教の中から真宗を選んで学ぶという、そういう形をとるかもしれませんが、真宗を学んでみると私が選ぶより以前から、真宗の方が私を選び、真宗の方が私に問いかけ、真宗の方が私を願い続けていたという、そういう世界が、やはり浄土真宗の世界だと思うのです。

これは北陸に生きられた念仏者である和田稠先生がよくおっしゃっていたことでもあります。靖国問題が私を問い続け、真宗が私を願い続けてくださっているという、そういうことを自分なりに今日は表現してみたいと思うところであります。

ハンセン病問題は今

まず最初に概略から申し上げますと、現在この国にハンセン病だった方々は、今年の五月一日現在ですが、一三三八名の方がおられます。一三三八名。多磨全生園、私が訪問しております多磨全生園には一六六名の方が園内で生活しております。そのうち三十二名の方が真宗のご門徒です。お寺がありまして、そのお寺を護持されておられる。毎月の例会とか報恩講とか彼岸、お盆等、一般のお寺と変わらないような形で、寺院活動、教化活動がなされております。三十二名と申しましたが、実は今お寺に出てこられる方は三名になってしまいました。

と言いますのは、平均年齢が八十五歳になりましたので、高齢化が進んでおりまして、認知症とか、介護が必要な状況にあるので、一人でお寺に来られる方が現在三名、そんな状況です。この間も十二月一日、二日でしたが、京都にあります大谷大学の学生さんたちが二十名ほどハンセン病療養所・多磨全生園に訪問に来てくださいました。先ほどビデオに映っていたのが多磨全生園なのですが、あそこに映っていた平沢さんという人が園内を案内しておられましたが、今、園内を案内してくださる回復者の方はほとんどおられなくなりました。昔はみんな元気で、「自分が生活してきた場所はこういう所だった」「ここでの生活は辛かったよ」という実体験を交えてお話を聞くことができたのですが、今はもうそれができなくなってしまいました。

代わりに今まで聞いたお話をもとに、資料を作りまして、若い学生さんたちに園内の歴史とか、ここで生きた人たちがいるということ、本当に希望を捨てずに生きた人たちがいるということを何とかお伝えしなければと思って、そんな園内見学をしました。二人の回復者の方に集まっていただきました。一人は八十三歳です。もう一方は八十六歳、とっても元気で、そのお二人の方が、若い学生さんたちに、自分たちの身に何があったのかを語ってくださったのですが、その時つくづく思ったのです。本当に直接お話が聞けるのはあと何年だろうということを思ってしまいました。いずれ、そう遠くない将来、この療養所の中にハンセン病だった方がいなくなってしまうような状況が今のハンセン病問題です。しかし、いなくなったら終わりということは決してないはずですし、いなくなったらこの問題は終わりというようにして

はいけないと思うのです。ハンセン病の方がいたのですから。熱い思いを、熱いメッセージを発し続けてきたのですから。私の代で終わりではなくて、若い世代の方々にこの問題を手渡ししていかなければいけないということを痛切に感じました。

人間であることを共に回復していく

最初に一つの言葉をご紹介したいと思うのですが、これはハンセン病問題というよりも、浄土真宗の法座で出会った言葉です。

「相手の人間性を無視すれば、自らも人間でなくなっていく。」

最初にお名前を出させていただきました和田稠先生の言葉です。

これはハンセン病問題に対して発言した話ではありません。浄土真宗の法座で聞いた言葉なのですが、我々の日頃の生き方がどうなっているのか、ということを問い直す言葉だと思うのです。

相手の人間性をばっさり切っておいて、自分だけが人間ですということは成り立たない。

相手の人間性を無視するようなことがあったら、その無視した側の人間も同時に人間でなくなっていくんだ、そういう我々の日常のすがたを教える言葉だと思うのです。私はこれは本当に自分のことだと思って心に深く響きました。

ハンセン病ということは、相手の人間性を長い間自覚もなく無視している、気づかずに無視してきたという問題であります。それはハンセン病だった方々が人間扱いされなかったという問題でもありますが、それだけではなくて、ハンセン病だった方を無視してきた私たちの側が実は人間ではなくなっていたのだという、そういうことを教える言葉ではないかと思います。したがいまして、ハンセン病問題に関わるということは、ハンセン病の方々の人間性を回復していくことと同時に、私たちも人間であるということを回復していくという問題であることを思います。人間回復、人間であることを回復していく、人間であることを取り戻していく、そう思います。どちらか一方だけではなく、同時に失ったのですから、相互に同時に回復していくという、そういう本当に奥の深い、心のこもった動きが真のハンセン病問題だと思います。

では、どういう形で回復していくのかということですが、それは何を失ったのかということをきちんと見つめていかないと回復する手立てがありませんから、私たちは何を失ってしまったのかということを、やはり人々に出会いながら、教えに道を尋ねながら、ここを聞いていくということが求められているのではないかと思います。

教団は何をしたのか

先ほど真宗大谷派の歴史の話がでましたが、一九九六年ハンセン病問題に関する懇談会ができました。でもそれは実は大谷派における運動の初めではなくて、明治の終わりに療養所ができて、その後に実は組織だった動きがあったのです。その二つの動きをちょっと簡単に振り返ってみたいと思いますが、最初、真宗大谷派の組織だった動きというのは、昭和六年、一九三一年のことでした。大谷派光明会というハンセン病に関わる組織ができました。この大谷派光明会というのは、一言で申し上げますと誠に残念なのですが、ハンセン病患者さんたちの隔離に協力をするという動きをした団体です。設立は一九三一年、昭和六年。どういう方々がメンバーだったのかというと、総裁は大谷派の御裏方、会長は宗務総長、副会長が教学部長、現在の教研の所長です。理事は当時の教学者、有名な方々のお名前がずらっと並んでいます。本多慧孝さんとか、武内了温さんとか、私たちの大先輩の方々です。評議員は、全国の各教区の教務所長。そのような教団を挙げての組織が昭和六年に創られていた。この大谷派光明会というのは何をしたのかということになりますが、私は短くまとめて三つのことをしてしまったと受け止めています。

一つは、ハンセン病というのはとても怖い病気だということを宣

伝していったということです。ハンセン病は怖い、このまま放置しておくと国が滅びてしまうということを宣伝していった。本当は感染力というのはとても弱い病気なのに、そういうことを宣伝していった。

二つ目は、療養所というのはとても素晴らしいところで楽天地のようなところなので早く入ろうという形で宣伝をしていった。実際は楽天地ではなかったのです。過酷な患者作業や強制労働があったり、名前を変えさせられたり、結婚はしても断種・堕胎がおこなわれたり、一生出られないという、そういう過酷な現実が待っていたのです。

三つ目は、過酷な状況に置かれた人々に宗教的な安らぎを与えてきたということです。慰安布教、慰問布教と言われているのですが、現実は過酷であります。その中でそこに皆さんがじっとしていることが菩薩の行に等しいのだという形で、隔離に救いとか宗教的な意味を与えてしまったということがあります。

大谷派教団がそういうことをしてしまったのですが、第二回目の大谷派の全国組織ができたのは、一九九六年らい病予防法廃止と同時にこの教団の中にハンセン病問題に関する懇談会が組織されました。

それは今まで各療養所に点として訪問していた私のような立場の者が、実は全国十三の療養所がありますから、その方々が一同に集まったのが一九九六年二月のことでありました。

いよいよ予防法が廃止されると、当時の宗務総長である能邨英士さんが一度集まれというように招集をかけて集まりました。私はその時に初めてこの教団でハンセン病に取り組んでいる人がこんなに沢山いるのだということを知りました。その方々とお会いして、時を同じくして、「大谷派もきちんと謝罪声明を出してそこからもう一度歩みを始めていこうじゃないか」というような話になり、出されたのが大谷派の謝罪声明です。何を謝罪したのか、誰に謝罪したのかということを簡単にお話させていただきたいと思います。

一体誰に謝罪したのか、これは言うまでもなくそのことによって被害を受けた患者さんたちです。そして、患者さんたちの家族の方々、この教団に関わるすべての人々に対して、これは間違いであったということをきちんと表明したのが、一九九六年の謝罪声明でした。ただ本当にやはり私たちが謝罪をしなければならなかったのは、すべての人を同朋という形で見出していかれた宗祖親鸞聖人です。宗祖親鸞聖人のお心に背いていたということで謝罪声明は出されました。本当にそういう意味で言えば、今回の出来事をきっかけにして宗祖親鸞聖人のお心に背いていた私たち一人ひとりが、本当に宗祖のお心にかなうような生き方を回復していく「はじめの一歩」であるという表明が謝罪声明でありました。謝罪声明というと何かこう相手に対して「ごめんなさい」「ごめんなさい」と言ってるようなイメージがありますが、もちろん一回は頭を下げますが、下げ続けるということではありません。共に歩んでいくような人間になっていくということを誓ったのが謝罪声明だと私は受け止めています。

謝罪声明から今、二十二年という時が流れ、来年の交流集会は二十三年目にあたるのですが、本当に人々と共に歩めるような私に

講師プロフィール

1959年東京都生まれ。真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会委員・東京教区存明寺住職。同朋会館教導。著書に『ハンセン病と真宗』『人間回復への道』（東本願寺出版）など。

なったのかどうか、そのことを振り返る交流集会だと思います。

何を謝罪したのか

次に、一体何を謝罪したのかということについてですが、「見抜けなかった」ということ。人々に苦しい思いや悲しい思いを与えていく行為を見抜けなかった、見過ごしてしまったことがやはり一番大きなことではないかと思います。その結果として「苦しみを与えてしまった」ということ。宗教の名の下にその人たちに苦しみを強いてしまった。これが一番大きなことであると思います。苦からの解放を願うはずの真宗がその「教えに背いた」ということ。教えに背を向けてしまった。人間を見失った、教えを見失った。このことがやはり本当に大きな課題ではないかと思います。先ほどハンセン病問題は願いに出会うという問題であると申し上げましたが、まったくこれは裏返しのようなことを私たちは願われているのです。世の中の闇とか人間の持つ闇を見抜いていく、そういう眼を獲得してほしい。あるいは、世の中に満ちている苦しみや悲しみの声をきちんと聞ける者になってほしい。あるいは教えや人間というものに真向かっていくような人間になってほしいということが、ハンセン病問題そのものから願われているのではないかと思います。

正しさという闇

ハンセン病問題といいますと、私とは無関係のどこかの誰かの問題だというイメージがあります。もちろん私にもあります。

そのように、ある意味では特殊に見える問題なのですが、底に流れる課題というのは人類共通というか、私たちに共通している問題なのだということを次にご一緒に確認をしていきたいと思います。

言葉をまとめて作ってみましたので、それをご紹介したいと思います。

一番目は、「正しさという闇」ということについてお話をさせていただきます。ハンセン病問題に関する懇談会が組織されたときに、真相究明ということが一つの課題になりました。なぜ、親鸞聖人の教団が人間を隔離差別していく政策に無批判に従ってしまったのだろうか。それをきちんと見ておかないと、時代が変わればまた同じことを繰り返してしまうのが私たち人間だと思いますので、一体なぜ、私たちの先輩たちはハンセン病の隔離に協力をしてしまったのか。明治の終わりから昭和の初め、戦後までの『真宗』『宗報』にハンセン病に関して出ている記事を片っ端から読み返していくという作業を仲間のお坊さんたちとしました。その中から見えてきたことは、正しさ、まじめさ、ということでした。悪いことをしているということを感じている文章はほとんどありません。本当にかわいそうな人たちだ、この人たちを救おうという使命感にもえた正しさというものが、底の底には流れている感じがするのです。人間というのは自らのところに正しさとか正義とかいうものをつけてしまえば、本当にどんなことでも行なえてしまえる、そういう存在ではないかというように思います。

真宗の法語に、次の言葉があります。

正しさの名のもとに
人は道を間違う

正しさということを握りしめて、人は自らの生きていく道を間違う、そういう存在なのではないですか、という教えの世界からの問いかけの言葉として私は受け止めております。自分の中に正しさというものがある時に、往々にして私たち人間は道を間違えてしまう存在なのではないかということを問われているような気がします。これはハンセン病もそうですが、人と人とが繰り返し犯している過ちとか争いということも、よくよく尋ねてみれば、私は正しいという思いが争いの根っこにはあるのではないでしょうか。夫婦喧嘩しかり、正しさを握りしめてお互いが争いを繰り返す現実は人の世の常であります。まさに戦争なんてそのとおりです。正義と正義がぶ

つかる。ハンセン病問題も同じであり、やはり自分たちこそが正しいと、正しさがついた時に何かが見え、何かが見えなくなっていく、そういう現実があるのではないかと思います。

親鸞聖人は『教行信証』の中に、人間が抱える正しさを「雑毒の善」と表現しておられる箇所があります。二一五頁、前から四行目を読ませていただきます。

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し、事、蛇蝎に同じ。三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく

（『教行信証』聖典 二一五頁）

外側は賢善精進の相を現ずるが、内側には貪瞋邪偽、奸詐百端、蛇蝎に同じなどという、いろんな毒のようなものをかかえ持つ人間よ、という私たちの姿を照らす言葉だと思うのです。本当は毒なのです。相手に害を与えるような心を私たちは内に持っているのではないか。それが善の仮面をかぶって表れてくるという、そういう宗祖のご指摘、宗祖の出会った言葉だと思うのです。

「善」。雑な毒ですが、善というかたちで私に現れてくる。雑毒の善。私は、大谷派教団が見失ってしまったことの根底にあるものは、宗祖が出会った「雑毒の善」というものこそが、私たちの中に生き続けていたものの正体なのではないかということを思います。本当に、この闇の正体を、雑毒の善として見い出していかれた宗祖親鸞聖人のご恩を思います。

ひとくくりの罠

二番目は、私が勝手に作った言葉ですが、「ひとくくりの罠」ということを考えていきたいと思います。

先ほどのビデオの中に、宿泊拒否事件というものが出てきました。二〇〇三年の秋に起こった事件ですが、かなり報道されましたので、ご存知だと思うのですが、ハンセン病だった方々が、熊本県の黒川温泉のホテルに宿泊予約をしました。その後、ホテル側から宿泊を拒否しますという連絡が来たのです。

このような事件は、二〇〇三年に初めて起こったのではなくて、私たちも体験しました。

御本山にお参りに、二泊三日で行くことになって、三十人くらいの団体旅行に行ったことがありました。一九九〇年代です。とある旅館に宿泊予約をし、御本山にお参りしようということでしたが、宿泊を拒否されました。

事前にお手紙を出して、「今ハンセン病は完治する病気で皆元患者さんです。問題はありません」と、ビデオに出ていたとおりのことを書いて「皆本山参りを楽しみにしていますので、よろしくお願いします」と手紙を送ったら、拒否をされました。

「私は、部落差別やいろんな勉強をしていますから理解していますが、一般の方々に理解がない。一緒にお風呂に入るとか、集団でやってくると、皆が驚くので、すいませんがご遠慮してください」ということがあったのです。それはやはり、楽しみにしていた方々には言えないですから、「何とか宿泊をさせてほしい」と交渉に行ったのです。しかし、対応された方が「そのような方々が、お風呂にどっと入ってくると宿泊をしている方々が驚くから、ご遠慮していただきます」と言われました。

その時に、落ち着いて考えてみたいのですが、ハンセン病だった人たちがどこかに行って、どっとお風呂に入っていくという光景を思い浮かべると、怖いと思うのが人間だと思うのです。ハンセン病だった人たちがどこかにいて、あまりよくわからないといろんなイメージがわくと思うのですが、そういう人たちが一気にお風呂に入ってくるということを考えると、ちょっと待てよと思うのが、ひょっとしたら私たち人間の日ごろの心かもしれないと私はその時思いました。

しかし、これは問いの立て方が間違っていると言いたいのです。ハンセン病だった人たちがお風呂

にどっと入ってくるということをイメージする以前に、ハンセン病だった方々と知り合い仲良くなって、歴史を聞いて、願いを聞いて「一緒に旅行に行きましょうか」と。人間同士だったら当たり前のことではないですか。後遺症がある、旅行に行きましょう、お風呂に入る。そう考えていくと、何でもないことではないですか。出会って、仲良くなって、後遺症はありますが、人間であるという、深いつながりの前に、一緒に温泉に行きお風呂に入ると考えてみたらどうでしょうか。さっきとはまた違った光景が出てくるのではないかと思います。

私はここでやはり大事なのは、ひとくくりにするときに、人間は人間が見えなくなるのであるということを、自分のこととしても思います。ハンセン病だった人たちとか、被差別部落の人たちとか、障害者の人たちとかと表現しますが、本来は一人ひとりの人間なのです。いろんな悲しみを抱え、いろんな歴史を抱え、いろんな願いを抱えている一人ひとりの人間なのですが、それをひとくくりに見たときに、もともとあった自分の中の差別する心が、どっと出てくるのではないかと思います。

以前、相模原の障害者施設で多くの人が殺されたという事件がありましたが、私はあの事件はひとくくりに人間を見ていった者の、罠にはまった姿だと思います。「障害者などいなくなればいい」という形で、ひとくくりにしてしまった。本来はそこにいろんな人たちがいるわけですが、それが見えなくなった、罠にはまった人間の犯した行為ではないかと思います。これは決して彼だけの問題ではないのです。本当に私たちが回復しなければならないのは、知りもしない人をひとくくりにすることではなくて、やはり本当に一人ひとりと顔を合わせて出会っていくということではないでしょうか。

ハンセン病問題に限った話ではなく、本当に一人ひとりが、願いをもった、あるいは悲しみを抱えた人間としてていねいに出会っていくということを、回復すべきではないかと思います。

真宗聖典の七六〇頁に、

「聖人は御同朋・御同行とこそかしずきておおせられけり」

（『御文』聖典 七六〇頁）

私はここに一人ひとりの人間を、道を求めて歩む求道者として、「御同朋よ」として見出していかれた宗祖親鸞聖人がおられるような気がします。ひとくくりと対称的な言葉が「御同朋」という言葉なのではないでしょうか。道を求めて歩んでいく人として、一人ひとりを見出すということが大事なことではないかと思います。

思いを言葉にする

三番目は、悲しみということは目に見えないものですから、私たちはよくよくその悲しみというものを見失ってしまうものです。悲しみを見失うということは、そこに悲しんでいる人がいるにも関わらず、その人の声がなかなか耳に響いてこない、その人の前を素通りしてしまうということがあるのではないかと思います。

「思いを言葉にする」。私が痛切に感じたのは、一九九八年七月三十一日に起こったハンセン病裁判です。二〇〇一年五月十一日、先程のビデオの中にもありましたように、判決が出て、小泉首相が最終的に控訴を断念するという、非常に大きな出来事が起こりました。その時に、裁判の裏側で何が

行われていたかというと、ハンセン病だった方々が立ち上がって、自分の今までの歴史を語り始めたのです。「こんなことがあった。それが今でもうずいている」という形で、自らの悲しみを語り始めたのです。私はその姿を見ておりまして心を打たれました。

もう何も言わずに、この世を去っていこうと思っていた方々が、自分の受けた悲しみを、今なお続いている悲しみを自分の言葉で表現している姿。ある方は自分の堕胎の事実を語り、ある方は両親と引き離された悲しみを語る。いろんな方々が悲しみを告白されたのですが、その姿を見ていて私は本当に身の震えるような思いがしました。悲しみを告白することの大切さを、「思いを言葉にする」大切さを、ハンセン病だった方々が私たちに教えてくれたように思います。

グリーフケアという動き

少し話は変わりますが、東京の世田谷にある自坊で、「グリーフケアの集い」というのを始めて十一年になります。その集いは、大切な人と別れたという経験を持つ遺族の方々がお寺に定期的に集まって来て、お寺で浄土真宗の世界に触れながら自分の思いを表現していくという集いであります。

一昨日もその会が行われたのですが、東京の片隅のお寺に毎回、毎回多くの方々が集まってこられ、口々に大切な人を亡くした今の自分の思いを表現していかれる。私は、今の自分の思いを言葉にして表現をしていくということは、とても大事なことだと痛感しています。

表現することによって、そこで共感というものが生まれたり、自分の言葉が自分の身から離れていって人と出会うということが起こったりしますから、今の自分の思いをきちんと言葉にして表現していくというのは、とても大切なことだと思います。そのことがきっかけになって、親鸞聖人の言葉と出会うということが起こりうるのです。

悲しみを見失うということを取り戻していくということ、悲しみをきちんと受け止めていくということ、見つめ続けていくということ、共通の地平を回復していくという問題が、グリーフケア、ハンセン病のみならず、我々人間の大きな課題なのではないかと思っております。

ハンセン病家族訴訟という動き

今、ハンセン病問題は、「家族訴訟」ということが大きな問題になっています。ハンセン病になった方々の家族の苦しみや悲しみに光をあてようとする裁判です。家族訴訟というのが行われていて、十二月二十一日に結審、裁判が一応一通り終わって、二〇一九年の六月二十八日に判決が出る時を私たちは迎えています。

長い間、ハンセン病だった方々の家族の悲しみというものに光があたらなかった。全生園でのことですが、全生園で入園されていた方が亡くなると、園の中でお葬式が行われます。お葬式には、遠く離れた故郷から家族の方がお参りに来られることもたまにあります。しかし、ほとんどの場合は、家族の方は来られないのです。なかには遺骨をもって故郷へ帰るはずなのに、遺骨を全生園の雑木林の中にそっと置いて帰っていかれた方がおられたとのことです。家族の遺骨を捨てて帰っていくということですから、そんなことがあっていいのかと思うのですが、家族の方は遺骨さえ持って帰らないことがあったそうです。

また、私がいつも会っている八十三歳の女性は、十六歳の時にハンセン病療養所に入所したのです。十六歳ですから、高校生ぐらいでしょうか。その時に過酷な園での生活に耐えられなくなって、強制労働とか八人の雑居部屋などの生活に耐えられなくなって京都の故郷に帰ったそうです。帰ったら今まで優しくしてくれたお爺さんがこう言ったそうです。「お前がいなくなると皆が忘れるから、もう二度と帰ってくるな」と。

いかがでしょうか。この遺骨を捨てた家族の方、帰ってくるなと言ったお爺さんは冷たい人だった

のでしょうか。私は今、はっきりと違うと思います。遺骨を置いていかなければならないほど世の中が厳しかった。大好きな孫に「もう二度と帰ってくるな」と言わなければならないほど世の差別が厳しかった。お爺さんが冷たかったのではなく、遺骨を捨てた家族が冷たかったのではなく、そのような行動をせざるを得なかった社会全体の悲しさというか、冷たさというか、苛酷さというものがあったのではないかと思います。

いったい誰がその社会をつくったのかということが今まさに問われているのが「家族訴訟」という問題なのではないかと思います。誰がこの社会をつくったのか、誰がそんな冷たいことをその人をして言わせてしまったのかということを、一人ひとりが考えていくということは大事なことなのではないかと思います。

一人ひとりを同朋として見出す

また、昭和二十八年に入所された方々が人間であることを回復する運動を起こしました。「私たちも人間なのだ」と訴えを起こしたのです。なぜそのような大きな動きがあったのかと言うと、先程のビデオの中にもありましたが、昭和二十八年には特効薬「プロミン」が出来て病気が治る時代になったにも関わらず、この国は隔離条項を残したまま「らい予防法」を改正しようとした年、それが昭和二十八年です。昭和二十八年に「らい予防法」が改正されて、これからも隔離が続くといった時に入所された方々は反対運動をしました。国会周辺までデモ行進をしたり、各療養所でハンガーストライキをしたり、「僕らは囚人ではない」と書いて看板を立てたのです。様々なかたちで解放運動というか、人権闘争をしたのです。

それで、今私はみなさんと共に、私たちの宗派はその時一体何をしたのかということをご一緒に考えたいのです。

「あそこに行くと何不自由ないよ」「楽天地だよ」と勧めた方々が療養所の中で過酷な生活を送ることになり、戦中・戦後をとおして、昭和二十八年に「自分たちは人間なんだ」ということを声を大にして訴え始めたときに私たちの教団は何を成し得たのかをみていきたいと思います。昭和二十八年というと同朋会運動が始まる前の同朋生活運動というものが行われていました。戦後の混乱期からこの教団を本当に血の通った親鸞の教団に戻すのだという動きが始まったのが戦後からです。

昭和二十二年、同朋共生運動というものが出来、本廟奉仕道場が開設され、昭和二十四年に蓮如上人の四五〇回忌が厳修されました。その後、同朋会運動の前身である同朋生活運動というのが発表され、真宗本廟奉仕が組織されました。昭和三十一年には宗門白書が出され、昭和三十四年、同朋会館が完成し、昭和三十六年、宗祖七百回御遠忌法要が厳修され、同朋会運動が始まっていった。教団の中では、本当に、親鸞の教団に帰ろうという様々な動きが、だんだん積み重なっていた頃、自分たちが押し込めた人たちが、人間だと立ちあがった時に、この教団が何を成し得たのかと。実は、何も出来なかったのです。私は、これを記憶するべきだと思うのです。人々の悲しみの声や訴えの声に背を向け、同朋会運動を推進していったのです。宗祖がおっしゃった同朋という言葉は、何々寺の門徒という意味ももちろんありますが、そんな狭い意味ではなくて、目の前で、苦しみや悲しみやいろんな問題を抱えながらも、今を懸命に生きようとしている人をひとりの人として、人間として見出していかれた言葉が、「同朋」という言葉なのではないでしょうか。

しかし、教団はハンセン病だった方々を同朋として見いだしていくことが出来なかったと言わなければならない。今、私たちのところにその課題が来ている。一人ひとりを同朋として、受け止めていく眼を回復してほしいという運動が、私は、ハンセン病問題という運動ではないかと思います。一人の人間を同朋として見出していくチャンスが与えられてきた。私にとっては、ハンセン病問題の大きなテーマであります。一人ひとり

を同朋として見出すことを見失ってきた歴史というのは私たちにはたくさんあります。そのような人間を見失ってきた歴史そのものから、もう一度、人間を同朋として見出していく眼を、今こそ回復していくものであってほしいという訴え、願いがハンセン病問題には満ちあふれているのではないかと思います。ハンセン病問題に出会って、私は、この教団のお坊さんと出遇いなおした気がしています。いろんな方々から、いろんな声を聴いたことそのことが、私にとってのハンセン病問題なのだと、何かリンクしていくようなことがたくさんあるということを思います。

倶會一處なる世界に生きよ

最後に「倶會一處」という言葉について申し上げます。これは、ご存知のとおり、『阿弥陀経』の中に出てくる言葉で、倶に一つの世界で出会うと、阿弥陀の浄土と言われている世界の風景を表している。倶に一つの世界で出会おうと、この言葉が、多磨全生園の納骨堂の正面に掲げてあるのです。「倶會一處」、納骨堂の中には、私が三十年間出会ってきた多くの方々が遺骨になって納まっておられます。今、療養所にいる人たちの数よりも、その納骨堂に入られた人たちの数の方が多い時代になりました。一人ひとりの顔を思い浮かべたりするのですが、この「倶會一處」、お経は鏡だと言われていますが、この世の中では一緒になれなかったから、せめてあの世で一緒になりましょう、などという言葉ではなくて、「倶會一處」というのは、もっと厳しい、叫ぶような言葉だと最近思うのです。

どこにも開かれていないではないか。「倶會一處」という世界が。死んでも、故郷へも帰れない、どこにも開かれてない、この世の中、人の世の現実を直視するものであってほしいという叫びのような気がしてきます。どこにも人として出会うという世界が開かれてないこの世の現実を、きちんと直視し「倶會一處」の世界を願う者であってほしい。「倶會一處」なる世界に生きる者であってほしいという、「倶會一處」という言葉は、叫びのような言葉に聞こえてくることがあります。

私が願われ続けていた

やはりハンセン病問題をとおして、私たちにメッセージを送ってくださっているのではないかと思います。

ハンセン病問題というのが、数ある問題の一つで、それを自分が選んで学ぶという形をとるかもしれませんが、よくよくハンセン病問題を学んでみればそこには、もとより私たち人間への本当に心のこもった深くて広いメッセージが込められているのだということを、申し上げたかったのです。真宗と一緒だと思います。真宗という世界も、たまたま、私はお寺の長男に生まれて、真宗を学んだのですが、よくよく真宗の教えを学んでみれば、私が選ぶ以前から、既に私が選ばれていたという、既に私に問いが投げかけられ続けていた、私が願われ続けていた、世界に出会うということが願われ続けていた、というのが、真宗だと思いますので、真宗の学びとハンセン病の学びというのが、全く別のものではなくて、通底するものだということを申し上げて、私の話を終わらせていただきたいと思います。

（終）

真宗仏事研修会

「なむあみだぶつ」を訪ねませんか？

―真宗の荘厳に学ぶ―

宗務所本廟部長 近松 誉氏

二〇一八年十二月十四日、富山東別院会館において、テーマ『なむあみだぶつ』を訪ねませんか？―真宗の荘厳に学ぶ― として、講師に近松誉氏（宗務所本廟部長・大阪教区慧光寺住職）を迎え、真宗仏事研修会を二十九名参加のもと開催しました。本誌では、その講義録を掲載させていただきます。

ただいまご紹介をいただきました近松と申します。

本山では、真宗本廟（東本願寺）の式務所と参拝接待所をあずかる本廟部というところで仕事をしています。一九九五年に宗務所に入り、出版部、青少年部、御遠忌本部、総務部、財務部、教学研究所などいろんなところで宗務を経験しながら、お寺（自坊）のこともさせていただいています。

今日は教区テーマ、「なむあみだぶつを訪ねませんか？」をいただきながら、本尊論、荘厳、真宗の儀式など様々な言い方がありますが、真宗の荘厳に学ぶというサブテーマを掲げお話をさせていただきます。

昨今では儀式というもの、これは僧侶にとっての大事な部分ということもいえますが、かつてはそれがしっかり行われていた地域であっても、非常に簡略化が進んできました。私は出身が大阪ですが、二十代の頃には、まだ葬儀も脇導師（わきどうし）、鑿役（きんやく）もいる葬儀が行われていましたが、近年では脇導師どころか「鑿役もいらない家族葬ですので一人で来てください」いうことが増えるなど、非常に簡略化が進んできました。

一方、僧侶の側も、なぜ儀式を執行していくのか、若い寺族を中心にはっきりしなくなってきました。「仏事」。こういうものを取り去ってしまって仏教は、宗教は成り立つのか、気になっています。こうして教区にお邪魔をして共に考える機会をいただく中で、真宗の寺族、門徒が儀式というものをどのように考えていくのか。「これはこうなっている、これはこうだ」と決めつけるのではなく、「このように承っているがどうでしょうか」と共に考えていくような形で、課題を共にし、課題を提起できればと思います。

一 南無阿弥陀仏と儀式

(一) 儀式の意義

一口に儀式と言いますが、儀式という言葉を使う時には、プラスの意味とマイナスの意味があるような気がします。私たちは、儀式というと決まり切ったものを皆で淡々とやっていくものだと決めてかかってしまうことがあります。しかし、私のような普通の人間でも、衣、袈裟を付けさせていただいて念珠をもって立つと、おのずから雰囲気のようなものが出てきます。そこで、儀式を執行する人が話をする人、そしてそれを聞く人という場ができてきます。私たちの真宗では「僧侶分」という言葉があります。「僧侶分」というのは、御同朋としてかわりはありませんが、このように衣、袈裟を付けるとその分限としてその役を果たすということだと思います。そのすがたと、いわゆる「お荘厳」によって、おのずからそこに説明をせずとも定まってくるものがあります。儀式というものは、そういうところに大きな要素があって、おのずから納得していく部分があるのではないでしょうか。

つまり、僧侶・門徒とも凡人同士ではあるが、その分を尽くしていくなかで、私たちは儀式というところに自らが入っていきます。私たちが念珠を持って合掌すれば、一番簡単で身近ではありますが大きな儀式となっていきます。袈裟をかけ念珠を持って、合掌して「南無阿弥陀仏」と言えばそこから儀式が始まる。何か荘厳で長時間のものだけが儀式と言われるのではなく、私たち人間にとって儀式が密接に関わっているということになります。

ここで、一例をあげさせていただきます。これは、どこにお招きされても、よくお話ししているものですが、中東のイラクにシャニダール遺跡という遺跡があり、今から四～五万年くらい前のネアンデルタール人の遺跡が発掘されました。そこでは、遺骨のまわりに花粉がたくさん発見されたことが報告されています。これは、ネアンデルタール人がその遺体に花を供えていたということだという説があります。そして、遺体の横に小さな石組みができていました。どうやら火を焚いていたようで、何か祭祀のようなものをしたような形跡があります。

つまり四～五万年くらい前の、私たちとは血縁関係、近縁関係がないネアンデルタール人の時代から、人間というのは死を悼んで、その死を悲しんでいました。花を手向けるということは、何らかの感情の動き、つまり死を悼む、悲しむ、ということがあったのでしょう。

すでに数万年前から私たち人類は、生・老・病・死ということ、特に死というものに対して特別な感情を抱く生物であった。私たちには感情の揺れ動きというものがあって、そのことを形にしていく。これがまさに儀式の源流であったのではないかと考えられます。つまり教学があって宗教が発展してきたということではなく、感情の動きがあって、それが儀式化され、儀礼化され、そこに論理的な裏打ちとしての教学が誕生していくという考え方と言いましょうか、人間の感情というものをどう受けとめていくのかが、宗教の原点であったのではないかと、私は考えています。

人は儀式によって、様々な節目によって心に始末をつけてきたところがあります。ある種の型をもって私たちは節目を知ってきました。たとえば、いわゆる学校年度でいえば、四月一日付で新しい学校に入ったり、新学年を迎えたりしますが、実際は四月一日ではなく、四月七日頃に入学式や始業式があり、みんなで並んで先生の話を聞いて、やっとその学校なり学年が始まったと実感するのではないでしょうか。卒業式もそうで、学校年度としての学年末より前に行われますが、卒業式に出席すれば「ああ、卒業だ」という雰囲気になります。このように、私たちはある種の式典をもって人生の節目にしているというようなことがあります。

このようなことは、私たちの宗派でいうと、得度式や帰敬式があります。得度式とは、「信心を得て、信心を獲得して、彼岸に度する」という意味で名づけられていると思います。また、「三宝を敬い、三宝に帰依する」ことを誓う儀式が帰敬式でしょう。これらの式を受けたから本当に信心を得て、彼岸に度する（渡る）ということに叶っているのかどうかは私たちの立場では分かりません。しかし、こうした節目をもって、そのことをどのように受け止めるのかを考える機会が与えられます。

「得度式を受けても本当に得度をしているのか」「帰敬式を受けても、本当に帰敬の誠を尽くしているのか」ということを、一つ一つの節目をとおして私たちが考える機会をいただくというところに、儀式のもつ意味があるのではないでしょうか。

昨今は、最初に申しましたように、儀式に対する考え方が少々否定的になってきている時代ではありますが、本当に儀式は不要なのでしょうか。私たちはどのように儀式をとらえているのか。少し、儀式というものが狭い範囲で捉えられているのではないか、という気がしています。

また、葬儀について少し申し上げますと、最近のニュースで流れていましたが、東北大学の谷山洋三准教授が、お経の持つ効果を分析して、色々実験しておられるとのことでした。例えば、ペットなどを亡くした人に集まっていただき、その人たちにその記憶を思い出してもらう時間をとったのち、お経を聞いてもらったグループと聞いていないグループに分け、その後の精神の安定の度合いを調べましたといいます。すると、お経を聞いたグループの方が、意味が

分かっても分からなくても、非常に精神が安定しているという結果が得られたとのことです。これは、皆さんの実感としてどうでしょうか。葬儀を執行する僧侶分の方であっても、参列するご門徒の方であっても、葬儀という儀式を経験していく中で、単に死者を送っていくということだけではなく、その中で私たち寺族が一所懸命に葬儀の場に向きあって、誠を尽くしていくような儀式を執行することによって、どこかで「つかない区切りを、つけていく」ような感覚を経験された人もあるではないでしょうか。

しかしながら、一方で、大阪でも直葬ということが出てきました。どこかでそういう簡略化されたものを求めている人もいるでしょう。そういう状況、時代であるからこそ、儀式のもっている本来の意義を僧侶、門徒が共に確かめあっていく。こういう時代であるからこそ、あえて共に考えてもらいたいと考えています。

(二) 真宗の儀式

本山で十一月二十八日に報恩講の結願日中が勤まりましたが、報恩謝徳という言葉があるように、私たちの宗祖に対する恩に報いていく、仏恩報謝ということを形にしていく、仏恩をたたえるということは非常に大事なことです。その恩徳は、結讃に出てくる「如来大悲の恩徳は……」の言葉に代表されるように、私たちの信心歓喜の姿を現している。仏恩に感謝していくことが真宗の儀式の基本であろうかと思います。

ところで私の母の実家は能登で、高岡、金沢にも親戚がいまして、こちら、富山の方々もそうですが、そうした北陸の人たちは特に「つとまる」という言い方をされます。儀式は「つとめる」「つとまる」の両方の言い方があります。仕事としては「勤める」ですが、真宗の儀式、真宗のお寺や真宗門徒の中では「勤まる」という言い方が多く出てきます。「勤まる」とは、おのずから、つまり自然、しからしむるということ。私たちとしては、一所懸命に勤めたが、結願が済んだら「今年も報恩講さん勤まったね！」という。「勤める」とは、自力のこと。そういう、自分でつとめたということではなく、阿弥陀さまの徳によって勤まったこれは他力ということを表しているのではないでしょうか。

この「勤まったね」という言葉の響きに真宗門徒の方々の土徳、すばらしさとか、いただきの心を感じます。自分で勤めたという気にならない人たち。そこに自然ということ、仏のはからいによって勤まった。そのことを「自然荘厳」と言ってみたり、あるいは阿弥陀経の中では「功徳荘厳」と説かれます。つまり如来の功徳がそこにはたらいて、如来のはたらきによって勤まった儀式だというのが真宗の儀式ということになります。報恩謝得ということと共に、大切にしたい儀式の本質であると思います。

二 真宗の荘厳

(一) 「荘厳」の考え方

「本尊」ということにいく前に、「荘厳」という考え方についてもう少し考えていきたいと思います。荘厳というと、何となくお飾りをすることをいっているようなイメージですが、仏教学の先生にお話を伺うと、この荘厳という言葉は、元々サンスクリット語で「vyūha ヴィユーハ」と言うそうです。『仏説無量寿経』は『スカーヴァティー・ヴィユーハ』(Sukhāvatīvyūha)が正式名称で、「極楽の荘厳」という意味だということですね。

「vyūha ヴィユーハ」とは整然たる配置、超越して優れた配置、見事な配置という意味があり、単なるお飾り、デコレーションではありません。デコレーションではなく、優れたものをお見せしている姿。単なる表面的なものではなく、ここには信仰であるとか精神というものも含まれ、それを形、具象化したものを「荘厳 vyūha ヴィユーハ」といいます。

本来、真実そのもののすがたは法身であるということがいわれます。『唯信鈔文意』などで説かれているように、法身は「色もなし、形もましまさず」と教えられます。そして「こころもおよばれず。ことばもたえたり」と教えられています。本来、尽十方無碍光如来と呼ばれる仏は、はたらきであって、色も形もない。はじまりも終わりもないのが法身だということですね。それは具象化できないが、仏の側から私たちに対して、そのことを示してくださるお姿をいただくという考え方です。荘厳は私たちが整えて、私たちが着飾るよう

にしているものではなく、私たちが仏のお手伝いをして、この形を整えさせてもらっているのです。

ですからお花も私たちが整えて、私たちが仏さまに供えているのなら、この花の向きは仏さまの側に向いていなければならない。そうではなくて、仏の側から私たちに手向けられた姿を表現しているのです。そう考えると荘厳ということは真宗にとって、とても大事なことだと思います。

荘厳というものは本来、具象化できないものを形にしています。少しずつ形は変わっているのかもしれませんが、覚如上人の伝記（慕帰絵詞）などを見ても、卓がご本尊の前に置いてあって三具足が置かれている。つまり、基本的な形式は南北朝の頃から変わっていません。この三具足という、花器があって燭台があって香炉がある形は、いわゆる敦煌の仏教遺跡にも出てくるもので、仏前の飾り付けとしては基本的なもので、歴史的に長い伝統を有したものです。つまり仏教徒の精神文化のようなものによって、長い間培われてきたものがこの形に表されています。香が焚かれ、光があてられ、そして花が手向けられるという形は、その基本的な形であって、単なるお飾りということではなく、仏のはたらきを私たちに示すために精緻に整えられたものなのだと思われます。

では、それは具体的には何を表現しているのでしょうか。「仏のはたらき」を表現していると一口でいいますが、そのはたらきというのは、つまり功徳荘厳であるから、仏の功徳が成就した世界です。私たちには成就の世界が示されて、そして本願成就のところから私たちが願われる存在になっていく。つまり果があってその因が語られる。私たちに自力の因があって往生が叶えられるのではなく仏から果が示される。そういう意味でいくと、

安養浄土の荘厳は
唯仏与仏の知見なり
究竟せること虚空にして
広大にして辺際なし

（『高僧和讃』真宗聖典四九〇頁）

という天親菩薩和讃が思い起こされます。

安養浄土の荘厳、そのお姿は、ただ仏の知見が表現されたところであって、虚にして空である。そして広大にして際がない無辺の世界である、と。「正信偈」には無辺光とありますね。つまり、安養浄土の世界をお見せしてくださる姿ですよということ。それは私たちにとっては時代を越えて、場所を越えての共通の姿を表現しています。

たとえばある優れた方がおられて、その方が「僕がこのように浄土の姿を考えたからこれを見たらいいのだ」ということを言い出す。そうした方が、何人も出てきたら、こうして私が今日富山に来て、富山別院の本堂にお参りして、仏さんにお遇いしても、私が地元にある難波別院にお参りするのと同じようにそのお姿にお遇いすることがなくなるかも知れません。

そうではなく、真宗門徒はどこのお寺にお参りしても、同じように仏をいただいて、御開山に出遇って、蓮如上人あるいは歴代の上人に出遇って、太子、七高僧に出遇うということが、荘厳ということによって、どこに行っても同じような形でその姿を拝することができる。このように形が整えられているというお姿を見ることによって、お内仏でも同じことですが、同じようにそこにお参りすることができます。そういう意味で、「整っている」ということの大事さが私たちに示されているのが荘厳ということだと思います。

㈡　真宗の本尊

次に、荘厳の中心になっていく「本尊」。そのはたらきの中心に

講師プロフィール

1970年大阪府生まれ。同志社大学文学部卒業。大谷大学院修士課程中退。95年から真宗大谷派宗務所に奉職。大阪教区第４組慧光寺住職。主な著書『東本願寺小景』（難波別院）。同明新聞の連載『再建の軌跡』執筆担当。共著に『真宗本廟造営史』（東本願寺出版）

なっていく「本尊」についてお話ししていきたいと思います。

荘厳の中心は当然、本尊であるわけですが、数年前に浄土宗の宗会で、浄土宗の本尊は阿弥陀如来であるが、立像が正しいのか、座像が正しいのかが論議されたことがあったと記憶しています。また、天台宗や禅宗などでは特定の本尊の定めがないなど、各宗派における本尊というのは、はっきりしていないことがあります。ところが私たちの真宗では、木仏、絵像の違いはあっても阿弥陀仏の立っていらっしゃるお姿（立像）が本尊です。これが定まっている宗派は、案外少ないのです。

阿弥陀如来が座っておられるということは、悟りを開かれたおすがたでしょう。そこから立ち上がられたということは、衆生に向かって歩みだされたということを現しているわけです。浄土真宗の本尊は必ずこのお姿です。

このお姿のもとは何かというと名号です。名号のはたらきを絵に表したら、この姿になるということです。阿弥陀如来、すなわち「尽十方無碍光如来」が私たちの本尊ということになります。尽十方は、後光（ごこう）によって示されています。あらゆる方向に、碍（さわ）りなく照らされる光ということです。実はこの光が一番大事なんです。サンスクリットでいうアミターバですね。すべての衆生に光が当たっている。そのことを象徴するために、内陣は金色（こんじき）の世界となっています。すべての光がお互い照らしあうという『阿弥陀経』に出てくる姿です。この無碍光、無量光の中から人のようなお姿となっておられるのが阿弥陀如来の姿です。

つまり本来、「はたらき」であって、そういう「はたらき」を示す光がある。本当は色も形もましませずと親鸞聖人から教えていただくのですが、しかしそれでは私たちにはどこを向いてよいかわからないので、このように仏の側から私たちにはたらきかけて、歩み出してくださるお姿を私たちは拝しています。これが他の宗派よりはっきりしているのが、浄土真宗の特徴ではないでしょうか。

と申しますのは、他の宗派のお寺にお参りしますと、薬師如来、大日如来だったり、本当に色々な仏さまがいらっしゃいます。一つのお寺の境内に色々な仏さまがおられるわけです。それもまた、大切な信仰のかたちでしょう。しかし、浄土真宗のお寺ではそうではない。一つの本堂があって、そこに本尊が安置されている。非常にシンプルな形になっています。

そのように受け止めていくと、本尊の姿が非常に大事になってきます。この光が、どこから現れてくるのかをもう少し考えると、絵像ではわかりにくいですが、ご寺院の本堂にある木仏の本尊をよくよく見ていただくとわかります。蓮台（れんだい）があって、蓮台から茎のようなものが後ろに立ち上がり、その上から光が出される。その光の前に人のようなお姿が現れてくる。まさに尽十方の無碍光のはたらき、それを法身といい、その法身が方便として表れてくださっています。これがご本尊のはたらきのあり方を、如実に表現していると思われるのです。

浄土真宗の本尊の場合は、必ず蓮台があって、そこに茎が立ち上がり、光がその前にあらわれてくる。つまり蓮の花が咲いているところ、すなわちその下は泥の世界、私たちの苦悩の世界（娑婆）であり、その上に蓮の花が開き、光が放たれる。つまり衆生の苦悩があって、はじめてそこに仏が現れてくるという考え方です。

そういう考え方からすると、たとえば「南無阿弥陀仏」とか「帰命尽十方無碍光如来」とかの名号が掛軸になっているわけですが、この場合、本尊として依用できる掛軸は、蓮台が描かれ、名号が書かれているということが望ましいでしょう。後光が描かれていれば、より正確であるということになります。しかし、「南無阿弥陀仏」のみ書き、横に書いた人の名前が書いてあるだけの場合、これは床の間の掛軸として用いるものであろうと思います。後光、蓮台が描かれていることが大事になってきます。

つまり、真宗の本尊は、仏がそのはたらきを形にして私たちに示してくださっているということです。蓮台があって、光があってその中にそのはたらきを示す言葉が書かれている形、この形そのものは、他の宗派にもあるようですが、それをはたらきとして明確に位置づけたのが親鸞聖人、蓮如上人でないでしょうか。

本尊のはたらきが定まっていて、そのことの受け止めが明確になっているのが真宗の本尊です。それを中心とした荘厳というものが真宗の特徴です。そういうことが明

確になっていれば、おのずからそれ以外の儀式というものが定まってきます。そのことがあれば儀式というものはある程度工夫していけるものだと思います。

本廟部におりますと、様々なところから、現代的な儀式を求めて儀式の改革ということをおっしゃっていただくことがあります。一方で、伝統をしっかり守っていくべきという声もいただきます。基本的には、本尊と荘厳という考え方がしっかりしていれば、そういう新しい表現も成立する可能性はあるでしょう。仏のはたらきを現すというところを大切にしていく。それを私たちがいただいていくという姿勢を大切にしていくことが大事なのではないかと思います。

三　真宗寺院の伽藍と荘厳

㈠　真宗本廟両堂の様式と荘厳、御影堂門の特徴

前章までは、儀式の根源の部分についてお話をし、その基本となる荘厳の考え方、その中心となる本尊のとらえ方についてお話しをしてきましたが、後半ではそれが本山や一般寺院の本堂では、どのように表現されているかを見ていきましょう。

私たちがあずかる一般寺院と本山・真宗本廟の一番の違いは「御影堂」と「阿弥陀堂」にわかれているということになろうかと思います。

現在の本廟部参拝接待所は、収骨や申経、帰敬式等への対応のみならず、昨今ではインバウンド（訪日外国人）の方に本山を説明するということも大切な仕事となっています。そうした外国人旅行者からの質問の中で多いのが、「なぜこのお寺はメインホールが二つあるのか？」というものです。メインホール、なるほど本堂のような大きな建物が二つある。これをどう考えるのかです。普通、お寺には本堂しかない、なぜそうなっているのか。この問題は大事なことだと思います。

真宗本廟（東本願寺）は四回焼失し、そのたびに再建されてきました。再建事業の中で、上棟式に際して棟札が書かれます。その棟札には、建物の正式名称が書かれています。例えば文政の再建（二回目の焼失の後）では、御影堂の棟札には、「浄土真宗本廟本願寺開山影堂」と書かれています。これが御影堂の正式名称で、これを略して御影堂と呼んでいる、ということになります。一方、阿弥陀堂の棟札には、「本願寺無量寿仏宝殿」と書かれていて、この名称に建物の性質、性格が端的に表されているといえます。

御開山聖人がいらっしゃるところ（御開山之御座所）、すなわち宗祖の廟堂が御影堂で、本願寺の本尊・無量寿仏（阿弥陀仏）の宝殿（本堂）、すなわち本願寺の本堂が阿弥陀堂ということになります。

ご存じのとおり、一二六二（弘長二）年に親鸞聖人が亡くなられた十年後、東山大谷の地に廟堂が建てられたのが本願寺のはじまりで、私たちの本山の始まりはこの廟堂です。廟堂とは、「はかどころ」であり、御真影のまします「お住まい、道場」でもあろうかと思います。

戦国時代、顕如上人と教如上人の時代に、本願寺と織田信長が争った、いわゆる大坂本願寺合戦（石山合戦）がありましたが、その際に全国のご門徒に何と言って檄を飛ばされたかというと、大坂にあった本願寺のことを「御開山之御座所」といい、「その御座所を信長の馬の蹄でけがすわけにはいかない」と言われました。つまり、私たちの本山というのは、寺院ということ以上に御開山の御座所ということ。それは、御開山がいらっしゃる、唯一無二の場所であるということです。

一方でその廟所は、三代覚如上人の時に「本願寺」という寺号を名のります。この寺号公称というのは、現代のイメージで言えば寺院化ということ以上に、一宗を掲げるというような意味の方が強かったのではないでしょうか。本尊を安置して、寺院であるという宣言をした。この頃に、本尊が親鸞聖人の教えにしたがって阿弥陀仏と定められたのでしょう。そして、七代目の存如上人の時に二つのお堂を分けて建てた際に、御座所としては御影堂があり、その教えのはたらきの根源は阿弥陀堂にあるというのが本山の姿であり、私たちの本山には二つのお堂があると位置づけられてきたのでしょう。このことを外国から来られた旅行者の方々に詳しく説明するのはなかなか難しいですが、しいて言えば、「この宗派を作った人のお住まい、道場」と「教えのお堂」の二つがあるということです。顕

如上人や教如上人の書状や棟札など、当時の資料からすると、戦国時代から江戸時代の人たちは、御開山の御座所ということを強く意識していたように思われるのです。

さて、この二つのお堂の荘厳についてもう少し詳しく見ていきますと、御影堂の内陣は阿弥陀堂に比べ金箔を使っている場所と量が少ないということが言えます。

また御影堂は、内陣本間と余間（六軸之間、十字之間）それぞれの間に敷居の溝が切られ、建具が入るようになっています。つまり、それぞれが「部屋」になっています。外観で言えば、装飾的な組物も少なく、軒先（垂木）に金物がありません。つまり、御影堂は住宅風の造りであって、「御開山のお住まい、道場」としての建築であることを意識しているわけです。

一方、阿弥陀堂は建築上「禅宗様」といわれ、中国から伝わる仏堂形式で建てられています。内陣・余間には建具を嵌めこむ仕切りがなく、柱や壁の部分に金箔を多用して『仏説阿弥陀経』に説かれる浄土世界を表現しています。

このように御影堂と阿弥陀堂では、細部にわたって相違があります。たとえば、広縁に立って見上げてみるとすぐわかりますが、軒先が比較的簡素なのが御影堂、組物が複雑に重なり合っているのが阿弥陀堂です。仏堂としてのかたちを精緻に表現しているのでしょう。御影堂は、お住まいであり、道場であるということなのだと思います。

再建するたびに、どちらが先に立柱式、上棟式を行っているかというと、必ず御影堂から立柱式をしています。すなわち御開山の御座所から再建しています。私たちは御開山のおかげで、阿弥陀さまの教えに出遇っているわけで、建築的にも御開山の廟堂を優先して建ててきたのでしょう。

江戸時代のある書物によると、まず御開山のお堂（御影堂）があって、私たちは御開山を通して阿弥陀さまにあうわけであるから、そのお堂は御影堂の背後にあっても良い。しかし、それでは衆生に阿弥陀さまの功徳が伝わりにくいので、阿弥陀さまの側でわかりやすく横に出てきてくださっていると受け取るのだというようなことが書いてあります。

そういうことから考えますと、本山の正式名称を「真宗本廟」といい、「本願寺」ともいうわけですが、これが歴史的にも教学的にも非常に意味のある呼び方だと思われるのです。

基本的に、本山の晨朝では、まず阿弥陀堂で『漢音阿弥陀経』が勤まります。そこでは阿弥陀仏の功徳成就（くどくじょうじゅ）の世界が広がっており、私たちはまずそのはたらきに触れることになります。その後、座を移して、御影堂で『正信偈・念仏・和讃』が勤まります。つまり、宗祖の著作が語られることで、私たちは御開山によって阿弥陀仏の功徳成就のはたらきについて教えをいただくわけです。

ちなみに、阿弥陀堂での『漢音阿弥陀経』は、昔から微音（びおん）でとなえることとなっています。まれに、読誦する声が小さいのはなぜですか、という質問があるのですが、これは、「私たちの前には阿弥陀仏のはたらきが満ち満ちているが、私たち衆生には聞こえていない」「功徳が満ち溢れているはずなのに、私たちがそれに気づけていない」ということを表しているのです。ですから、あえて微音で称えているのです。

これは、表面上はわかりにくい表現かも知れません。実際に「わかるように勤めるべきだ」「意味がわからないものを勤めて、ありがたいのか」と言われることがあります。しかし、逆に言えば、「意味がわかったらどうなるのか」ということです。意味がわからないと、頭で理解できないと感動できないというのは、はたして本当に真宗なのでしょうか。私は、そうではないと思います。そういうところを超えたところに阿弥陀仏のはたらきがあると考えたい。そのような受け止めもあるのかと思っていただければと思います。

阿弥陀堂で仏のはたらきにふれ、御影堂でそのいわれを聞く。こうして両堂の聞法ということが行われるのです。

ここで、両堂それぞれの内陣をもう少し具体的にみますと、阿弥陀堂には当然阿弥陀如来が安置され、そこに「宮殿（くうでん）」があります。この宮殿には、扉がついていません。これはなぜかというと、二十四時間、四六時中阿弥陀の功徳、阿弥陀のはたらきがひろがっている。さえぎるものがないということを表現しています。一方、御影堂の方は御真影が宮殿ではなく「御厨子（ずし）」内に安置され、その御厨子には扉があります。つまり、御開山は私たちと同じく人間であ

り、その「お住まい」であるわけですから、朝夕に開閉するかたちをとっているのです。

それでは折障子はどういうことなのかといいますと、これは人間の側から「私たちは今日これで帰ります」ということで、礼儀として閉めるというものです。この内陣、外陣の境は何か差別性を有しているということではなく、そこが浄土世界、教えの世界であって、私たちのいる場所（娑婆）、それを拝する世界とを分けているのです。

さらに言えば、阿弥陀堂の内陣の中央には、阿弥陀如来（中尊）がご安置され、その阿弥陀仏の教えを私たちに伝えてくださったインド、中国、日本の七高僧の姿が掲げられています。つまり、その教えの世界と歴史とを表しています。「私たちの真宗は三国伝来の仏教である」ということを、阿弥陀堂の内陣で歴史的に証明していくという、教団としての名告りのようなものがそこにあるのだと思います。

なお、近世においては北余間に、亀山天皇の厨子がありました。これは本願寺を名告ったときの天皇が亀山天皇だったということで、幕末の政治的理由が大きく左右しています。亀山天皇の厨子が東西分派の頃からそこにあったわけではありません。幕末、一八六二（文久二）年頃から置くようになって、幕末の大火で焼けて、明治維新以降もそこに置いて、今回の修復でおろしました。

なぜ、そうなったかというと、文久二年に北余間の檀上が空いたので、当時の状勢に鑑み、朝廷に顔向けするために置いた、ということになるでしょう。では、それ以前はそこに何があったかというと、実はそこに東照宮、つまり徳川家康の厨子がありました。もともと、東本願寺の土地を寄進したのが江戸幕府の創始者である徳川家康であり、そのことに敬意を表していた。それが、幕末の動乱期に至って、幕府ばかりではなく尊王派にも配慮する形で「亀山天皇の勅命によって寺号を公称したのが本願寺だ」ということを示すため、その厨子を置くようになったのだと思われます。同時にこのとき、阿弥陀堂の南側奥には、幕府からの用材寄進を受けて東照宮が建てられ、そこに徳川家康の厨子は移徙されています。なお、この用材寄進は、直前の一八五八（安政六）年の大火で東本願寺が三度目の焼失をした際、幕府が財政難であることを理由に寄進を行わなかったものの、両堂が再建された後に用材寄進を申し出てきて、御堂に用いないなら、ぜひとも境内に東照宮を建てるようにと指示してきたという事情によるものです。当時、幕府もまた、東本願寺が幕府寄りの立場であると、周囲に示したかったのでしょう。そのための、意図的な寄進とも思われます。朝廷と幕府、双方の顔を立てなければならなかった東本願寺の苦衷が現れているようにも思えます。

阿弥陀堂は、念仏の歴史をも表している御堂です。その中には、七高僧だけでなく歴史的に本願寺を庇護してきた人に敬意を表してそこに置いていたという歴史があるともいえます。そうした歴史というものには、プラスの面とマイナスの面があり、歴史を学ぶことによって、単に「古くて伝統があって良い」あるいは「間違ったものだ」と決めてかかるのではなく、私たちの先輩たちが真宗の歴史を伝える中で、色々と苦労してきた、配慮があった、そういうことをしっかりと受け止めていくことが大事になってくると思います。

次に御影堂について申し上げれば、蓮如上人の御遠忌が一九九八（平成十）年に勤まりましたが、それ以前は御真影の御厨子が中央にあって、その外陣から向かって右側、いわゆる北脇壇には前住上人の御影が掛けられていました。その北側は「六軸之間」です。そして反対側の南脇壇には歴代の宗主が描かれた「列祖双幅御影」が掛けられていました。その南側が「十字之間」で、十字名号が掛けられ、さらにその南側に「九字之間」があって九字名号が掛けられています。これが一九九八年までの形です。

この形は、御影堂が親鸞聖人の御座所であって、代々その御座所の留守をあずかってきた方々のおすがたがそこにある、ということです。そして、その親鸞聖人がどのようなことを教えてくださったかを端的に示す「帰命尽十方無碍光如来」の名号、「南無不可思議光如来」の名号を、それぞれお掛けして、この建物でそれを学んでいくというかたちが示されています。

なお、「六軸之間」の「六軸」とは教行信証六巻のことで、歴代の宗主、留守職が教行信証の教えを

受け伝えていくということを行うための部屋とされてきました。

これらのはたらきと役割とを表して、座敷風に作られたのが御影堂の内陣です。それが現在では、北脇壇に蓮如上人、南脇壇に前住上人、そして十字之間に十字名号が掛けられ、十字名号の両外側に双福の御影がそれぞれ分けて掛けられています。

この形は歴代の法要が勤まる際にとられていた形を、普段の形にしたものです。これは、蓮如上人の五百回御遠忌を機に、本願寺を再興された蓮如上人を顕彰していくということが定められたことに基づいた改定です。

いずれにしても、御影堂は御開山の御座所で、その座敷、お住まいというものを表現して、そこにも歴史が表現されています。本廟の留守職が代々そこにいらっしゃった歴史を表現し、両堂の荘厳、各尊前が定まっています。

仏説阿弥陀経の世界（功徳荘厳の世界）、そして宗祖の御座所（聞法の道場）。これで両堂の違いがご理解いただけたのではないかと思います。

(二) 御影堂門

最後に御影堂門について少しお話をします。この門が二層の楼門形式になったのは、東西分派直後ではありません。一七三九（元文四）年、時代的には徳川吉宗の時代、東西分派してから百四十年ほど経ったときのことです。この年に楼門形式になっており、はじめて楼上に釈迦三尊像（釈尊、阿南尊者、弥勒菩薩）を安置しました。

禅宗の場合ですと、あの門の形式は三門形式といい、いわゆる三解脱門、すなわち空、無相、無願の三解脱を果たしたものだけが通ることのできる門です。京都には南禅寺や東福寺、大徳寺など禅宗のお寺がたくさんあります。浄土宗の総本山である知恩院もそうですが、それらのお寺にある門は皆同じ形をしており、禅宗本山の場合は三門、三解脱門といわれます。通常のイメージですと、塀とともに境内と外を区切るものが門ですが、禅宗の伽藍を思い出していただきますと、三門は伽藍の中央というか、法堂の前にあります。境内と外を区切るものではなく、外にはまた別の門があります。これはつまり、実用的な門なのではなく、通る人を限定した門、象徴的な門だということになるわけです。ですから、晋山式などでしかくぐらないそうです。そして、そこには一尺（約三十㎝）の高さの蹴放という敷居が付いていて、これは女人禁制を表すとされています。江戸時代、女性が足を見せるのは、はしたないといわれていた。一尺の高さがあったら着物の裾がめくれるので、つまりこの高さは、女性はくぐってはならないということを表しているのでしょう。

それに対して、私たちの本山は三門とはいいません。大門といいます。また、御影堂門に蹴放（敷居）はありません。現在、残されている江戸時代の図面を全部調べましたが、どの時代の御影堂門にも、敷居はありませんでした。

時折、大門というのは、「大師堂（御影堂）前の門だから大門だ」というお話をうかがいます。ところが、実はそうではなく、『浄土論』に出てくる二十九種荘厳のうちの第十六、荘厳大義門功徳のはたらきを表しているから、大義門の意味なのだと、言い伝えられてきました。『浄土論』に説かれる仏の様々な功徳の中に、荘厳大義門功徳というものがあります。これは、浄土はすべての衆生に開かれた世界だということを表しています。真宗の教えは、そのはたらきはすべての衆生に開かれている、ということです。だから敷居も必要ないわけです。荘厳大義門功徳を表す門であるから、大門と略称されるのです。

寺院建築、古建築の専門家に聞きますと、本来、建築学上あそこに敷居がないと、あの楼門形式は非常に不安定であり、ああいう基礎部分に足固めがないとダメなのだそうです。しかし、建築上のデメリットがあっても敷居を設けなかったのは、やはりそこに明確な意図があったからなのではないでしょうか。すべての衆生を受け入れるためということに重きをおいていたのでしょう。同じく、阿弥陀堂門にも敷居がありません。

また、大門の正面の噴水の所から見ると、日中はいつも御開山の姿がはっきり見えます。烏丸通から親鸞聖人の御真影が見えるように工夫されているのだと思います。これも大事なことです。すべての衆生が親鸞聖人の、仏説無量

寿経の教えに出遇えるよう開かれた門なのではないでしょうか。

真宗本廟の伽藍は、たとえば御影堂は禅宗の開山堂に形が似ており、阿弥陀堂は法堂（本堂）に似ています。大門は三解脱門に似ています。つまり日本の代表的な仏教建築の形に似せていますが、その中で、真宗独自の考え方をそこに十分に込めて、造営されてきたのが、本山の伽藍形式なのだということが言えると思います。

㈢　一般寺院とお内仏

次に、一般寺院とお内仏について、お話をさせていただきます。本来は、ご門徒がたが本山にこぞってお参りいただくのが一番よいのですが、当然、全国津々浦々のご門徒さんがそう簡単に、各地から本山に来れるわけではありません。したがって、仏の方がそのことを案じてくださって、本山だけ、親鸞聖人のもとにだけ現れるのではなく、各寺院、別院に現れてくださったといただくのが各寺院の本尊である、という考え方が、江戸時代からありました。その場合は御真影が中心ではなく、本尊が現れてくださったのだからご本尊が中心になります。つまり、本山は唯一無二の御開山の御座所なので、御影堂が中心となっていますが、現れてくださった本尊をお迎えする全国のご寺院の御堂では、本尊が中心になる、ということです。その本尊を中心として、親鸞聖人も蓮如上人も、太子・七高僧も、前住上人も、諸仏として、いらっしゃる。諸仏として各ご寺院の御内陣に現れてくださったのが一般寺院の形です。

そして、そのご寺院にも、様々な事情があって来られないという方のために、それぞれのお家にはたらいてくださるのがお内仏の本尊です。江戸時代の方々は、そのように受け止めておられました。だから「本尊をお迎えする」という言い方があるわけです。本山の帰依処としている御開山の御座所から現れた本尊をお迎えするということです。

四　真宗の荘厳に学ぶ

最初のお話しにかえっていきますと、私たちの先輩方は「報恩講が勤まった」、「儀式が勤まった」とおっしゃってきました。そして、「ご本尊をお迎えする」とおっしゃるのは、そのはたらきをご存知だったから、そういう言葉が伝わってきたのだと私は受け止めています。

私たちが「南無阿弥陀仏」という、この言葉にどういう思いを持つのか、阿弥陀仏というその本尊のはたらきというものを今一度深くいただいて、気づけていない私たちも気づかせていただく。そしてその私たちのお家にあるお内仏、私たちのお寺、私たちの本山というところにそのはたらきをとおして私たちが繋がっていく、出遇っていくということでしょう。

私たちの真宗の儀式というのは、そういうことが根底にあっての儀式であって、単なる昔から伝わってきたからしているのではなく、そこには、今日色々お話してきたような「はたらき」というものが本来あって、そういう「はたらき」を意識していくような仏事であるということです。この仏事、儀式というものがあって、心が安定してくる、定まってくる。そういうことがあるわけですが、そのことだけではなく、現代においては、そのことをあらためて確かめ、その受け止めとしてのご法話というものが大事になってきます。

儀式によって、私たちが集まって、人びとの心が落ち着き、あらたまったところで、そのいわれをご法話としていただく。この二つが並び立たないと、現代においては説得力を欠くことになります。ですから、儀式が大事か、ご法話が大事かということではなく、それはどちらも大事で必要欠くべからざるもの、それぞれが儀式と教学というものがそれぞれを補完しあうような形、そういうことが大切なのではないでしょうか。

仏事というものは、仏をお迎えする心であるとか、お伝えしようとする心が集まったものなのでしょう。そこにおいて儀式が勤まっていく、そしてそのことを現代の言葉として私たちのいただきとして、僧侶分、まさに僧侶の分限として、凡人（ただびと）だが、その儀式をとおして、その分を尽くしてお伝えをしていく、そのことが仏事の中に願われているのではないでしょうか。

（了）

研修会報告①

「青少年のつどい」開催

【1／19～20】

会場 長野県栂池高原スキー場

本年度も青少年のつどいが一月十九日から二十日にかけて長野県の栂池高原スキー場、民宿うつぎ荘を会場に参加者二十六名を迎えて開催されました。内容はスキーやレクリエーション、団体生活、朝夕のお勤めを通して仏様を身近に感じてもらうことを目的としています。寒い時期でしたが病気やけがもなく終えられたことにほっとしています。

日程中こころに残ったことは、参加スタッフの方の「久しぶりに参加したが以前にくらべ子供たちの勤行中の声が非常に大きく上手で感動した」という声を聞き、私もいたく感心し、とてもうれしく思いました。また、参加者や保護者から、「来年も参加したい」「スキーが滑れるようになり自信につながった」「他の学校の子と仲良くなれ、いろいろな世界を見る経験になった」等の感想をいただきました。ふり返ってみると、こちらの方がいろいろしてあげていると思いがちですが、逆に気づかされることも多く、実は子供たちからたくさんのものをいただいているのだと、あらためて感じたことは非常にありがたい御縁であったと思っております。

最後に、夏には八月五日から七日の日程で児童研修大会が滑川市の東福寺野自然公園で開催されます。興味のある方は是非スタッフとして参加しませんか。よろしくお願いします。

第十組 本行寺 生地 光

研修会報告②【2／25～26】

富山教区「秋安居」開催

会場　富山東別院会館

二〇一九年二月二十五日～二十六日、富山東別院会館において、講師に木村宣彰氏（真宗大谷派嗣講・安居本講講者）を迎え、講題を「『安楽集』講要」とし三十三名参加のもと「秋安居」を開催しました。本誌では、三人の参加者の感想文を掲載します。

教師資格は検定で取得したため、これまで専門書を読む機会はありませんでした。秋安居を前に輪読会にも参加しましたが、漢字が難読で読むだけでも大変な上、特に中国の時代背景などの知識がなかったため理解しにくかったのですが、第一日目の開講の辞で十分時間をとっていただき、言葉の一言一言（凡夫と衆生など）について熱く講義され、大変興味深い内容でした。このような時代背景を踏まえた上で、聖浄二門の教えから道綽が『安楽集』において、いかにして浄土教に帰入し時機相応の教えを構築されたのかが、少し理解できたような気がしました。参考資料として配布された「道綽関連略年表」は読んだ内容を時系列的に整理する上でも大変参考になりました。

第十一組　常念寺　松田　雅秋

＊　＊　＊

念仏はするけれども、それはただ音声としての南無阿弥陀仏であり、そこに信心があるのか、その念仏は信心から発せられたのか、念仏して生きていく覚悟というものが本当にあるのか。これは門徒の話ではなく、僧衣を着ている私自身も同じ疑いをもちながら生活をしている。高僧方のように自力を尽くした上で聖道の証しがたさ、煩悩の断じがたさを自覚して念仏の一門に帰するのとちがい、答えだけを与えられているからやはり自覚が生まれないのだろうかなど、長い間もやもやしている。ただ今日の講義の中で先生が「真理は唯一悟るか悟らないか」とお話になったのを聞いて今一度、信心とはどういうことかを問い直すための大切な視点を与えられたように思う。ありがとうございました。

第十二組　長安寺　庭田　龍信

＊　＊　＊

一般門徒です。昨年も出席させてもらい、今年度事前輪読会に出ましたが、読むことも難しく、本番も難しいだろうなと思っていました。木村先生のお話はそうした懸念を吹き払うものでした。深い学識が垣間見られましたが、話は大変聞きやすく興味深く、あっという間の四時間でした。ありがとうございました。

第十組　蓮光寺門徒　金尾　誠一

研修会報告③【3／18】

「真宗教学講座」開催

会場　富山東別院会館

二〇一九年三月十八日、富山東別院会館において、講師に藤場俊基氏（金沢教区 第三上組 常讃寺）を迎え、テーマを『歎異抄』に学ぶ」とし二十名参加のもと「真宗教学講座」を開催しました。本誌では、参加者の感想文を掲載します。

学生時代に『歎異抄』を読み、それで卒論も書いた。ただ、その時は異なるを嘆き、それを正そうとして書かれたものだという読み方をしていた。なぜ異なるのかという読み方など、全く考えていなかった。勢観房、念仏房の考え方を正すような立場での読み方しかできていなかった。「進歩と向上」の考え方にとらわれてしまっている自分がいることに気づかされた。大学に入ったとき、「大学は問いを学ぶところだ」と言われたことを思い出した。

第十二組　託法寺　華蔵閣　行文

研修会報告④

「得度研修会」開催

【3／28～29】

会場 富山東別院会館

三月二十八日、二十九日に富山教区で得度研修会、研修会に先だって二十五日に事前研修会が行われた。富山教区で新たに九名の僧侶が誕生することになる。

富山教区では昔ながらの日程の一泊二日の研修である。この研修は富山教区教化委員会、寺族研修小委員会が主催であるが行われるまで委員会の会議では一泊二日でなく何日かに分けての方がいいのではないかという意見があった。実際、研修会を何回かに分けている教区もあったが、別院という場で寝食を共にすることでしか味わえないことがあるということや、思い出や仲間ができるという意見もあって今回も例年どおりの一泊二日で行われた。

私は得度研修会を主催する寺族研修小委員会の委員でもあり、准堂衆としても声明作法の講師として昨年に続き子ども班の声明を担当させていただいた。内容は直綴、墨袈裟の付け方、畳み方。『正信偈』草四句目下、念仏讃淘三、『阿弥陀経』。その他諸作法である。

今年は少なく四名だったが小学校四、五年生と小さい子が多く苦労した。集中力を切らせないよう授業時間と同じ四十五分刻みで休憩を取ったり、内容を工夫したり自分なりに声明を好きになってもらえるように、また僧侶という立場に興味を持ってもらえるように準備をして

研修を行ったつもりではあるが伝える、教えるということは本当に難しいと感じた。自分なんかが講師で申し訳なく感じたこともあったが、考査が終わって子どもたちから「受かったよ」と笑顔で言ってもらえたことが嬉しかった。

夜に行われた講義・座談会でもあったが、これからが彼らにとっての僧侶としての始まりである。いろいろなことがあると思うが、私自身もたくさんの先輩方の助けがあって今がある。私も彼らとともに成長していきたいと思う。

そして願わくはこの子どもたちといつか、富山別院報恩講で一緒に外陣出仕ができたらと思う。

第十組　西元寺　神保　央至

＊　＊　＊

富山別院での得度研修会で私が心に残ったことは三つです。

一つ目は新しい友達ができたということです。休憩の時、他の男の子たちと遊びました。座布団で遊んだり、ハンカチ落としをしたり、お菓子を食べたりとても楽しく心に残っています。

二つ目は、お経の練習です。声の高さや、長さが難しかったです。『正信偈』は簡単だったけど、和讃がとても難しくてうまくできるのか心配しました。

三つ目は、最後のテストです。和讃が難しかったけど、今までは一番声が出ました。最後の合格か不合格かドキドキしました。合格と言われるととてもうれしかったです。

疲れたけれどとても心に残った二日間でした。京都での得度式までもう少し練習していこうと思いました。

第十組　正覺寺　見義　華月

研修会報告⑤

「ハンセン病問題現地研修会」開催

【4／1】

会場　東京都国立療養所多磨全生園

今は一般に開放されている多磨全生園は、風は冷たいものの花見や散策する人で賑わっていました。私たちも酒井義一さんの案内で、桜が満開の広い園内を巡りました。資料には「想像力をはたらかせ、ハンセン病だった人々の過酷な歴史に思いを馳せてほしい」と。納骨堂にお参りしたとき「療養所に納骨堂があることは異常であると思ってほしい」という酒井さんの言葉にはっと思いました。

また、ここで講演された宮崎駿監督の「あだやおろそかに生きてはいけない」の言葉を紹介され、深く感じるものがありました。

その後、園内の真宗会館で入所者、退所者五名の方のお話を聞くことが出来ました。小学生で入所した八十代の女性は「ここに連れてきた母に恨みはなく、ただ恋しい。今は弟家族が面会に来てくれ穏やかに暮らすようにしている」六十代の女性は「十一歳で入所し、母に捨てられたと恨んだが、退所後認知症の母を世話することになり、何で私がと思った。しかし世話をする中で、徐々に親子の壁が除かれた」

また、カトリックの男性は「自治会長をしていた時に、大谷派の謝罪声明が出てびっくりした。その後、大谷派の人々と出会い、自身が解放されていく気がした。多くの患者は親や兄弟を恨むことなく、反対に申し訳ないと思っている。一人でも多くの人にこの問題を知ってほしいし、伝えていきたい」と話をしておられました。

第十二組　敬恩寺　轡田　映子

研修会報告⑥

第二回「ハンセン病問題入門講座」開催

【4／22】

会場　富山東別院会館

この全四回のハンセン病問題入門講座は、二〇一九年九月十三日㈮～十四日㈯に富山・高岡両教区で開催される「第十一回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会」に向けての事前学習会として開催されました。勉強して当日に臨もうというよりは、「お待ち受け」の意味合いの強い講座であったとあらためて感じました。

講師の旭野康裕氏（高山教区・ハンセン懇委員）から「私はどんな親鸞さまを宗祖として仰いでいるのか」という問いかけがありました。多磨全生園で歌われている「しんらんさまはなつかしい」。国や世間から人間として生きることを奪われた人々が歌い伝えてきた親鸞さま。奪う側にいた私たちが伝えてきた親鸞さま。どっちが正しいのかではなく、何を願いとして親鸞さまと出あい、人と出あい、自分に出あっていくのかが問いとして聞こえてきます。

私がハンセン病問題に関わるのかどうするのかということではなく、すでにこの社会と歴史の中でハンセン病問題の真っただ中に立っていることにどこで気づくことができるのか。

ハンセン病問題はハンセン病という病にかかった人の問題ではなく、私がハンセン病の現実から何を聞きとったのか。出あいを通して、語り合い聞き合うことがハンセン病問題に関わるということではないかと感じました。

第十組　正覺寺　見義　智証

寄稿

第三四六回「蓮如上人御影道中」供奉人（ぐぶにん）を務めて

二〇一九年四月十七日から二十三日と五月二日から九日まで各一週間「蓮如上人御影道中」に「御上洛」の供奉人を務められた金尾誠一氏（第十組蓮光寺門徒）より寄稿いただきました。

一．はじめに

昨年から真宗大谷派吉崎東別院の伝統行事「蓮如上人御影道中」に参加しています。昨年は「御上洛」を自主参加、今年は「御下向」自主参加、「御上洛」は供奉人（世話役）を務めさせてもらいました。おかげでいずれも全行程を無事に歩き通すことができたことは、本当に幸いでした。この御影道中に携われた数多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

二．自主参加「御上洛」

この行事があることは、真宗大谷派（東本願寺）発行の『同朋新聞』で知りました。これまで登山や四国遍路をしてきたので、その延長として「道中」を考えていました。参加した「道中」は、旧街道や山道を歩き、寺院に泊り、会所で聴聞し、同行する方々と親交を深めていく毎日でした。そんな中、行く先々で合掌してお念仏でお迎えされる方々のお姿を見て本当に感動しました。今も真摯なお念仏がここには残っていると感じました。そして御影道中は自分の興味や知識を得る為のものでなく、歩く人、迎える人のお念仏が支える仏事と受け取るようになりました。

美しい念仏の姿　（写真：吉崎別院）

三．供奉人を拝命

昨年十一月末、吉崎東別院より「蓮如上人御影道中協力会」の推薦を受けての旨が記された「供奉人依頼書」が送られてきました。一度全行程を完歩しただけのわずかな経験しかないのに、道中の世話役である供奉人になるというのは、不遜でないかと思いました。しかし、今年の道中は、富山県の太田浩史さん（南砺市大福寺住職）が随行教導をされるということがわかったころから、「できれば是非話をお聞きしたい」という思いが強くなっていました。富山県の方が教導をされるというのは例がないようです。また、前年の道中ではお興係として高岡の前川一義さんが本当に生真面目に勤められている姿を見ました。早く富山県から後継者が出てほしいとの希望も聞いていました。加えて長く供奉人を務められた大先輩のあわら市在住の後藤金三郎さんにお会いした時、「真面目な道中を続けて下さい」と激励されたことも印象深く残っていました。こうしたことが供奉人となる決意を後押ししてくれたのかも知れません。

一月に吉崎別院で「供奉人集会」がありました。その時別院の五辻輪番から「歩きの中で教えに出会い、人と出会う。歩きは仏教の伝統、お釈迦様の歩まれた道」という話を聞かせていただきまし

「蓮如さまのお通り」の声が行く

た。そして、「供奉人をやらしていただくのだ」という実感が湧いてきました。

四．令和元年「御上洛」

実際の道中が始まると、太田教導のそば近くで多くの聴聞の機会をいただき本当に供奉人冥利につきる日々でした。先生は会所ごとにそこに相応しい内容を持ち出して話されました。何故こういうことがわかっているのかと思うくらい大変な博識であり、地元の人も初めて聞く話だったということを幾度も耳にしました。私はいつもワクワクした気持ちで何が話されるのだろうかと期待でいっぱいでした。こうしてこの道中は私にとってまさに「聞法」漬けの道中となりました。

高座で法話される太田教導

供奉人の役割としては交通係をいただきました。何しろ初めてのことで、しばらくは要領を得ることができなかったのですが、経験ある供奉人の方から色々教えてもらいどうにか役目を務めることができるようになったと思います。動き回ることが多く体力的にはかなり厳しいものがありました。しかし、何故か「つらい、疲れた」といった感情が湧いてこなかったのは不思議でした。たぶんそうしたことを思う以上に気が張りつめていたのかなと思います。

まぶしいような新緑の中旧街道を通る時、山や川、田や畑、家や街並みなどすべてが日本の原風景のようななつかしさで疲れを忘れさせてもらいました。また、会所や沿道では実にたくさんの人たちのあたたかい出迎えやおもてなしを受けました。こうした多くの方の信心のありようがこの三四六回も続く道中を支え続けていることを強く感じました。最終日、最後の難関は山科からの東山越えでした。宰領（さいりょう）（責任者）の鷲元さんが渾身の声掛けを途切れることなく続けられました。綱をつかんでいたみんなの「ヨイショ！ヨイショ！」の掛け合いの声が大きな力となって驚異的な速さで峠を越えていきました。まさに身口意の三業を捨てた捨身の境涯、実に澄み切った心となり私は涙が出て仕方ありませんでした。山を下って京都の街を歩く時、参加者の表情は道中出発の頃と比べ随分柔和になっているように感じました。

真宗本廟門首室での記念撮影（後列左から４番目が金尾氏）

東本願寺で帰山式が行われようやく安堵感が湧いてきました。門首室で門首、鍵役と記念撮影してもらいこの上ない思い出となりました。

五．終わりに

私はこの稀有な道中に是非若い僧侶の方に参加していただきたいと思います。道中には日本の各地からまた外国からも老若男女を問わず参加されています。こうした年代、性別を超えた人たちと目的を一つにして日々を送るという経験は願っても得られるものではありません。全行程を完歩された方はほとんどが七十代、八十代の方々でした。この道中は普通で考えることとは違う何かがあると思わざるを得ません。そうした高齢者の方から「人生の知恵」に触れることが期待できると思います。よろしくお願いします。

第十組　蓮光寺門徒　金尾　誠一

聴聞三題

太田教導が各会所で法話をされ、特に心に残っているものを記します。

一、揃っていないが合っている

ある日、朝のお勤めの後の法話の冒頭、「今日の道中のお勤めはなっていません。傲慢です。声明は聴聞です。調声のこころに合わせなければいけません」いつも温和な先生から発せられた言葉でした。一瞬何のことか理解できませんでしたが、すぐに調声とバラバラであったことに恥ずかしい思いがしました。その場の皆さんも同じ心だったと思います。数日後、先生から、「このごろ声明がよくなってきています」の言葉がありました。また、しばらくして「今日の声明は、揃っていないが合っています。合わせようとしなくても合ってくるんです」と言われました。心を合わせた声明に対する温かい慈悲の言葉と受け取らしてもらいました。

二、棟方志功と五箇山のお婆ちゃん

志功は戦時中から昭和二十六年まで福光に疎開していた。ある日、二俣和紙を求めて僧侶三人と五箇山へ行った時の出来事。

おバアちゃん

「子供の頃から聞法してきたが、一つわからんことがある。発願回向とは何ですか？ それをここで見せてくれ」

答えられない坊主三人。志功はくやしがって、転げまわる。

「不肖私が説明しても良いか」

「いい、いい」

志功、バアちゃんの両手を握る。

「あんた、今問うたことが発願回向。人間に問えることでない」

「あ、そやった。長年のつかえがとれた」

何故、その答えで納得したのか。

道中、発願回向でないことは一つもない。ハタと腑に落ちる。理屈でわからない。志功とバアちゃんのやりとりこれぞ文化国家。

三、戦時中も続けられた御影道中

（陸軍少尉和田喜八郎の回想）

昭和二十年、琵琶湖近傍でも米軍機の機銃掃射が行われるようになった。そこへ「蓮如上人様のお通りー」の声と共に行列が通る。

「防空壕に早く入れー」と少尉は怒鳴ったが、「戦争……、我々に関係ない。次の会所が待っている」宰領は睨み返して悠然と通り過ぎた。

とんでもない宰領がいたのは事実。それは今も受け継がれている。

世界遺産登録されている「サンチアゴ巡礼」、「熊野古道」はいずれも贖罪、清めの巡礼。

「御影道中」はすべて報恩感謝、世界に一つしかない真宗が生み出した類のない巡礼。世界遺産に値する。

蓮如上人御影道中

毎年四月十七日から二十三日と、五月二日から九日までのそれぞれ一週間にわたって行われる「蓮如上人御影道中」は、吉崎別院（福井県）で務められる「蓮如上人御忌法要」にあわせて行われる。

一四七五年（文明七年）、およそ七年間の北陸教化の末に吉崎を去った蓮如上人は、別れを惜しむ人々に形見の御影を残したと伝えられる。形見の御影は江戸時代中期、内紛を生じた吉崎から真宗本廟へと預けられた。以来、御影は琵琶湖西岸を通って吉崎に「下向」し、御忌法要を終えた後、湖東回りで京都に「上洛」する習いとなった。

その始まりは、一六七三年（寛文十三年）であると伝えられており、今年二〇一九年（令和元年）で三四六回目を迎える。御影道中は、上人が歩まれた京都と吉崎を結ぶ道程を、現在も随行教導や宰領（責任者）、数名の供奉人（世話役）と共に各地の会所で仏法聴聞しながら、上人の御影と共に往復五二〇㎞（御下向二四〇㎞・御上洛二八〇㎞）を歩く伝統的な御仏事である。

（南御堂第六四七号、二〇一六年五月一日より引用）

今回の紹介は、第十三組「同朋の会推進講座」です。

十三組では今年の三月、四月に各二回、合計四講座を十三組の同朋の会推進講座の前期講習として開催し今回の講座に受講した参加者の方々に三つの質問をした。以下がそのまとめである。

◆今回の講座に参加した経緯は何ですか

今回の講座を受講した参加者の受講した経緯は「お寺の住職から依頼を受けて」という声が多くを占めていたが、中には「お寺の役員になったことが後押しした」という声もあり、寺院活動に積極的に参加してくださる姿が伺えた。また、「同じお寺の友人に誘われて」や「主人がかつて受講していた」という声もあり、このような形で参加者の中から広がりが生まれることに繋がればと思うものもあった。

◆今回までの講座で分からないことや質問したいことは何ですか

初対面の方々で班を構成する緊張感も最初こそあったが、回を重ねるごとに座談で意見交換することに楽しさを感じてくれている声も多く、精進料理といった生活の中にある仏法の姿、初めて唱和した勤行や『三帰依文』の意味等に興味を持った声も多くあった。講座を通して初めてふれた仏教の言葉の意味を知りたいという声も多かった一方で、普段の葬儀等で聞く「院号」についても知りたいという声もあり、普段の生活の現場ではなかなか話題にならないことも多く挙げられていた。

◆今回までの講座を受けて思ったことや感じたことは何かありますか

「法名をいただく」という帰敬式について講師が話した際に、多くの参加者から自身の人生や価値観に自問をするきっかけとなったという声があり、座談中にもっと皆の意見を聞きたいという意欲が伺える声が多かった。一方では「若年層の参加がないので、若者の考えも交えて話し合ってみたい」という今回の講習会が抱えている参加者の年齢の偏りに対する投げ掛けもあった。仏教を若い世代と分かち合う場の模索は我々も困難さを感じている一方で、家庭の中ではなかなか話し合うことがない話題であるからこそ、このような場の力を大切にしていかなければならないのではないかと私自身感じた。

京都、本山に行けるのが楽しみだという声もあったことで、本山での講習会も参加者がおもいおもいに言葉を交わせる場になればと願う。

第十三組　持専寺　大伴　慎介

同朋の会推進講座（前期講習）をうけてアンケート

◆今回の講座に参加された経緯
- お寺（住職）から誘われて
- 主人がかつて受講していた
- パンフレットを見て興味を持った
- 京都にいけると聞いて
- 本山に行く機会が得られると聞いて
- 同じ門徒の友人から誘われて
- お寺の役員総代になったきっかけで
- 同朋の会の役員に誘われて

◆今回までの講座で分からないことや質問したいこと
- 八百年もの間、どのようなやり方で浄土真宗は残ってきたのか
- 帰命、帰依の意味
- 仏教用語が難解
- 三帰依をもっと分かりやすく教えてほしい
- 院号について
- 精進料理について
- 他の宗教との違いはどんなものか
- 「勝他・名聞・利養」とは違う人生とは
- 『正信偈』の意味
- お経の意味
- お内仏のお給仕に興味がある
- 「懇願」と「おかげ」の違いは

◆今回までの講座を受けて思ったこと
- 「法名をいただくこと」を聞いて、今までと違う生き方を考えるきっかけとなった
- もっと座談の時間が欲しい。皆の意見が聞けるのが良い
- 浄土真宗を知るきっかけになり、皆の意見も聞きながら自問するきっかけとなった
- 若年層の参加がない。もっと若い人の考えも交えて聞いてみたい
- 初対面の出会いが不安だったけど、楽しく参加できている
- 全員で勤行することに（同調）圧力を感じたが、読むことで気持ちの良さを感じた
- 講師のお話しはよく分かった気がする（会場の中にいる間は）
- 浄土真宗は困った時の神頼みとはまた違う感じなのかな
- 自分本位に生きていると改めて気が付いた
- 回を重ねるごとに少しずつ三帰依が響いてきた

※類似や重複する内容は一部補正を施してまとめた。

教区だより

（敬称略）

宗派経常費 完納御礼

二〇一八年度宗派経常費を御完納いただき誠にありがとうございました。ここに完納寺院をご披露申し、御礼にかえさせていただきます。

（二〇一八年七月一日～二〇一九年六月三十日）

第九組

西光寺（茶屋）　光圓寺　西光寺（長沢）
中堂寺　寶林寺　寶堂寺
永源寺　西圓寺　善通寺
禮行寺　速成寺　本覺寺
護念寺　深妙寺　樂圓寺
慶正寺　尊光寺　康樂寺
圓龍寺　長光寺

第十組

圓命寺　正覺寺（犬島）　覺證寺
聞成寺　蓮照寺　福恩寺
正覺寺（見義）　永福寺　應聲寺
淨行寺　慶念寺　專福寺（今湊）
專琳寺　滿念寺　永宗寺
善久寺　長龍寺　極性寺

第十一組

稱永寺　真證寺　專廣寺
養照寺　專入寺　西光寺（田中）
廣際寺　本廣寺　教正寺
西光寺（大浦）　光念寺　善行寺
入覺寺　正樂寺　佛念寺
立尅寺　圓照寺　竹願寺
光德寺　玉永寺　善覺寺
稱念寺　淨誓寺　光顯寺
圓滿寺　本敬寺　松林寺
願行寺　西養寺　真敬寺
圓常寺　淨信寺　無量寺
淨惠寺　等通寺　光蓮寺
光明寺　正恩寺　常念寺
照光寺　願成寺　祐教寺
岩隆寺

常念寺　安正寺　覺順寺
正源寺　善教寺　善性寺
德蓮寺　寶藏寺　報光寺
本行寺　了照寺　蓮光寺
米田専福寺　西元寺　淨光寺
乘善寺　長福寺　唯見寺
傳長寺　持專寺　念法寺
誓願寺　真行寺　勝光寺
真成寺　西源寺　照念寺

第十二組

託法寺　神久寺　圓覺寺
常念寺　長圓寺　常德寺
圓乘寺　光曉寺　勝樂寺
等覺寺　唯信寺　榮明寺
安成寺　照善寺　專正寺
眞宗寺　相順寺　大德寺
常願寺　得性寺　勝福寺
則善寺　佛現寺　願宗寺
正信寺　光德寺　得念寺
西照寺　長樹寺　願樂寺
明喜寺　淨永寺　本傳寺
辻德法寺　明源寺　心行寺
長安寺　善念寺　長寶寺
願蓮寺　願生寺

第十三組

樹德寺　養照寺　明願寺
專德寺　淨慶寺　持專寺
圓林寺　光誓寺　明榮寺
雲龍寺　善龍寺　光泉寺
念興寺　興行寺　西養寺
養現寺　本龍寺　願龍寺
龍照寺　長願寺　大安寺
明誓寺　常光寺　勝蓮寺
蓮通寺　善念寺　常泉寺
善久寺　正覺寺　明光寺
真淨寺　真友寺　光榮寺
榮顔寺　西心寺　西順寺
光照寺　改觀寺

書籍のご案内

本年度、新たに左記書籍を購入いたしました。
既存の書籍とともに閲覧及び貸出が出来ます。ご利用ください。

図書名	著者名	発行元
ハンセン病問題に学ぶ学習資料集	解放運動推進本部	東本願寺出版
東本願寺小景	近松　誉	難波別院
先生と親のためのLGBTガイド	遠藤まめた	合同出版
さよなら親鸞会　増補	瓜生　崇	サンガ伝道叢書
月刊住職		興山舎
仏陀との出会い		東本願寺出版

教化日誌

（二〇一九年一月一日～六月三十日）

1月

1日　初参り・初鐘の集い
8日　ハンセン病問題全国交流集会事前会議
　　声明作法講座
9日　社会教化小委員会、『如大地』編集会議
10日　青少年のつどいスタッフ会
12日　先門首御命日（～13日）
14日　開基上人御命日（～15日）【幽溪　浩】
15日　教区改編地方協議会「教学・教化部会」
16日　あいあう公開講座　【林　夏生】
17日　教区坊守会報恩講
　　教区改編地方協議会「財務部会」
19日　青少年のつどい（～20日）
21日　解放運動推進協議会公開講座
　　【髙木勲寛・小松雅子】
22日　声明作法講座
23日　門徒寺族総合研修会
24日　第十一組組会・組門徒会合同会
　　蓮如上人御命日（～25日）
25日　第九組組会
27日　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）
28日　教区改編地方協議会「組織部会」
29日　第十三組組会
31日　第十組組会

2月

1日　第十二組組会、秋安居事前学習会
4日　教区改編地方協議会「財務部会」
5日　秋安居事前学習会、第十三組組門徒会
6日　寺族研修小委員会
　　青少年のつどいスタッフ反省会
8日　第十二組組門徒会
12日　先門首御命日（～13日）
　　声明作法講座
13日　秋安居事前学習会
　　ハンセン病問題全国交流集会事前会議
14日　『如大地』編集会議
15日　開基上人御命日（～15日）【河村　浩】
　　教誨師会「総会」
19日　組織拡充小委員会
20日　秋安居事前学習会
　　教区改編地方協議会「教学・教化部会」
　　教区改編地方協議会「組織部会」
24日　蓮如上人御命日（～25日）
25日　秋安居（～26日）【木村宣彰】
26日　声明作法講座
27日　結の会
　　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）

3月

3日　別院奉仕研修
5日　教区改編地方協議会「組織部会」
　　教区坊守会聞法講座
6日　教区改編地方協議会「財務部会」
7日　社会教化小委員会
9日　第一回ハンセン病問題入門講座【黄　光男】
12日　先門首御命日（～13日）
　　声明作法講座
13日　『如大地』編集会議
14日　開基上人御命日（～15日）【二上　久】
18日　真宗教学講座　【藤場俊基】
19日　教区改編地方協議会「教学・教化部会」
20日　富山別院彼岸会　【岩佐幾代】
21日　〃　【辻　俊明】
22日　〃　【細川好円】
24日　蓮如上人御祥月命日（～25日）
25日　あいあう会、得度事前研修会
26日　青少幼年教化小委員会、声明作法講座
27日　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）
28日　得度研修会（～29日）

4月

1日　真宗本廟春の法要（～4日）
2日　ハンセン病問題現地研修（～3日）
5日　富山別院教化委員会
9日　教区改編地方協議会「組織部会」
　　声明作法講座
10日　手づくりおもちゃ講習会
11日　法話研修会Ⅰ　【瓜生　崇】
12日　先門首御祥月命日（～13日）
　　教区改編地方協議会
14日　開基上人御命日（～15日）【藤條法彰】
16日　組織拡充小委員会
17日　寺族研修小委員会
18日　青少幼年教化小委員会
22日　第二回ハンセン病問題入門講座【旭野康裕】
23日　『如大地』編集会議
　　あいあう会、声明作法講座
24日　蓮如上人御命日（～25日）
25日　教区改編委員会
27日　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）

5月

1日　五一会（教区内物故住職追恩法要）
9日　教区坊守会聞法講座　【水島　聡】
10日　門徒研修小委員会
12日　先門首御祥月命日（～13日）
14日　第三回ハンセン病問題入門講座【旭野康裕】
　　仏青定例学習会　【辻　明浩】
　　声明作法講座
　　開基上人御命日（～15日）【髙櫻大信】
15日　『如大地』編集会議
　　共学研修会　【佐野明弘】
20日　解放運動推進連絡協議会会議
21日　社会問題研修　【小谷みどり】
22日　青少年指導者研修会
　　【清水洋幸氏・長嶋恒大】
23日　社会教化小委員会
24日　真宗教学講座　【藤場俊基】
　　蓮如上人御命日（～25日）
25日　第十三組同朋大会　【青木新門】
27日　青少幼年教化小委員会
　　あいあう会
　　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）
28日　声明作法講座
29日　組織拡充小委員会

6月

2日　第九組同朋大会　【平野喜之】
3日　第十二組教区改編の取り組みにかかる意見交換会
5日　第九組教区改編の取り組みにかかる意見交換会
6日　寺族研修小委員会
　　第十組教区改編の取り組みにかかる意見交換会
7日　門徒研修小委員会
　　第十三組教区改編の取り組みにかかる意見交換会
10日　教区児童教化連盟「総会」
11日　青少幼年教化小委員会
　　富山解放連定期総会・記念講演会
　　【松村元樹】
　　声明作法講座
12日　第四回ハンセン病問題入門講座【北原　誠】
　　先門首御祥月命日（～13日）
13日　ハンセン病問題全国交流集会運営委員会
14日　開基上人御命日（～15日）【辻　明浩】
　　組織拡充小委員会
17日　第二回法話研修会Ⅱ　【瓜生　崇】
18日　『如大地』編集会議
19日　あいあう会
21日　第十組同朋大会　【佐野明弘】
22日　第十二組同朋大会
23日　第十一組同朋大会　【諸岡　敏】
24日　蓮如上人御命日（～25日）
　　ピースコンサート（映画、ライブ）
　　【ナーグシクヨシミツ】　【伊藤　元】
25日　教区坊守会「総会」
　　声明作法講座
26日　教区改編地方協議会
27日　宗祖親鸞聖人御命日（～28日）
　　教区保護司会「総会」

『如大地』第145号はいかがでしたでしょうか。本誌を読まれてのご感想、ご意見等につきましては、同封のアンケート用紙にて富山教務所までご連絡ください。アンケートへのご協力をお願いいたします。

住職任命

（二〇一九年一月一日～六月三十日）

二〇一九年二月二十八日
第十二組　光德寺　新田　唯
第十二組　善念寺　岩田　一定

二〇一九年四月二十八日
第十三組　雲龍寺　藤谷　英順

二〇一九年六月二十八日
第十組　浄光寺　齊藤　弘顕
第十一組　善行寺　茂利　真由
第十二組　得念寺　木下　幸多

得度

（二〇一九年一月一日～六月三十日）

二〇一九年五月六日
第十三組　常光寺　桑守　海

二〇一九年六月七日
第九組　光圓寺　安川志津子
第九組　深妙寺　田辺　博美
第十組　正覺寺　見義　華月

敬弔

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

（二〇一九年一月一日～六月三十日）

《住職》
第十組　蓮照寺　前住職　堀　定正　二月二十八日寂
第九組　中堂寺　前住職　五十嵐　皎爾　五月六日寂

《坊守》
第十二組　唯信寺　前坊守　平岡　ミツエ　一月二十三日寂
第十二組　本傳寺　前坊守　渕上　香代子　二月十二日寂
第十組　應聲寺　前坊守　和田　民子　二月十四日寂
第十一組　照光寺　前坊守　青柳　辰子　二月十九日寂

編集後記

平成最後の今年の冬は事前の予報通り記録的な暖冬少雪でしたが、四月に入って平野部でも積雪を記録するなど寒い春の始まりでした。おかげで例年よりも少し長く桜を楽しめましたし、花粉症の私は低温で花粉飛散量が少なく体調が楽でした。寒い春も悪いことばかりではありません。

先日門徒さん宅での月忌参りの後にお宅の庭の大きな桜やその他の木を見ながらお茶をいただきました。「桜の美しい見頃の時期はほんの数日、花が散れば掃除が大変だし害虫も発生する。他の木も薬剤散布や剪定に雪吊りなど、手間もお金もかかる。それでも手入れをしてきれいになった庭木を見ながら飲むお茶は格別においしいぞ！」というお宅の亡くなったお爺ちゃんの口癖の話題になりました。珍しくお参りに来られていた息子さんが「今はまだ忙しくてなかなか父のような落ち着いた優雅な心境に達していない。もっと年を取ったら自然とそういう気持ちになるのかな」と言われました。

ここで私は仏法に当て嵌めてみても「それは今だ今だ、いそげいそげ」とでも伝えなければならなかったのでしょうが、ついつい「今の世の中はみんな忙しいですから……」と流してしまいました。自分でもこの息子さんと同じような気持ちがあるからだろうなと思わされました。

さて、『如大地』第一四五号の発行に際して、お忙しい中原稿執筆にご協力いただきました方々には本当にありがとうございました。私のようなものにとっては人様に原稿をお願いするのも苦労なのですが、いざ自分でこの編集後記を任されただけでも四苦八苦でした。我が身の振り返り・気づき、何らかの糧にはなりました。

第十一組　専廣寺　蜷川　俊治